



俄羅斯紀聞二集

二

| | |
|----------|------|
| 屬附學大田稻早 | |
| 館書圖 | |
| 寄第 川田氏寄繪 | |
| 第 20 | ル 8 |
| 第 二 冊 | 2994 |
| 出帶許不外館 | 12 |

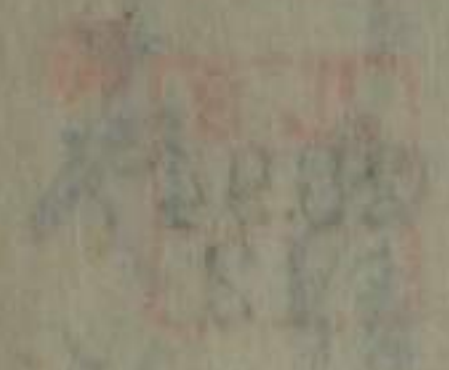
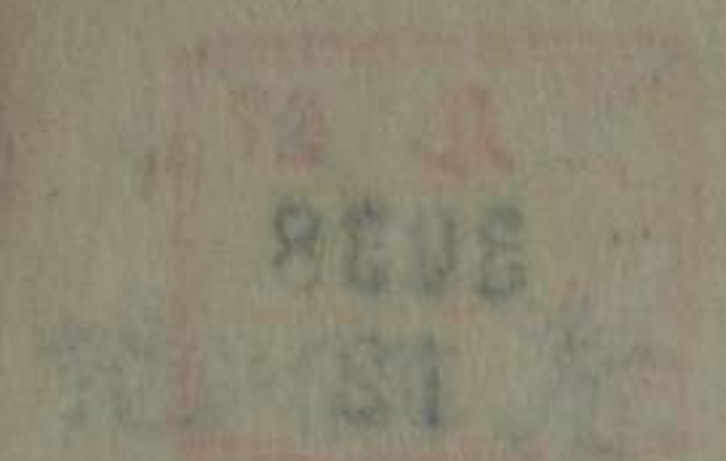


俄羅斯紀聞二集

第二冊

北邊探事補遺

蝦夷草紙附錄



Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as light grey or blue ink marks.

門 儿 87
疏 3038
卷 12

特
儿 8
2994
12

加罪酒出脚二集

北邊探事補遺卷之一

赤人問答

本質 按考し本編問答より一題名の註載と多しす毎
 條問と送きりぬる或は各頁に是れを注記ありしれども
 考す所の少き一なるより多くハ已に徳書の流と交ハ
 此書のものとの毎條逐件ありてく考すを時ハ問
 答の懸隔ある等し其れ問ハしず答しと列子
 彼ら物後より我亦也と考思し其後考ハ採録七一雜
 記也ハ少く存する人預めあま意となく己



一 佛法もいふを全き事なりや、
ある事ある事ありて、
意に唯日月のふりし、
画像ありて一と謂れある、
あふ大略と左に記す

永 安子魯西亞國日月ヲ專ら第ルヤ否ヤヲ知ラス西洋
書中説に所ヲ 概スルニ歐邏巴洲中古昔ハ日月ヲ神トシ
祭ルコトニアリ日ノ神ヲ「アポロ」ト云月ノ神ヲ「チアト」ト云
此余五星及種々大神ノ神ヲ祭シナリ今ハ然ラス今時モ日

月ヲ祭ルモノハ 韃靼ノ内及「亞弗利加」
間ニコレアリトイフ

一 仏祖の名も亦多し、
の名ハ少知母の名「ホ、ニテリ」ト云此婦人夢り神と
通して懐妊し一子を産み是則佛祖なり 釋迦の
法を以てたるとが如く、
と教化し、
如く大木に釘を打付けられ、
若し、

出入の別と俗と守く為の方便ありしと云て果は
上よりして正位様と別し之を多し即國の如し

按て漢人の後と存念し日本編子抄添せ對治
邪執端の抄添品刑柳生德澤云「半天連化閻の後
と念す仙組といふ」邪執埃利斯替「な之し」ホ、三
リハ漢客のいふ「ボ、ホ、テリ」ト云て聖母と云れり
律をいふものあり彼亦一向の天をいふこと諸説
と念す

彼亦を「日天の如き」と云ふなり又翼を画するあり

國あり則左の佛祖ありといふ

一 宗門の流風俗を尋るるに其の如しと云す
按て此を俗流のものに於て之を流漢客の後
す本編考観の如し候と云す

其大略と云す我亦修治を流風俗なり候と云
々漢客の如きもの云と云す

一 別録にありし文字の形を流のものに佛祖の形と略し
て流のものとししれと云す
流佛よりいみ家の外なり右流の如き候と云し

うへ連きて朝夕おむとせし

押入客おの流と合と十字とを信を於物と
十字なるは朝夕なるは

一此に左番と右番と異ふ人せ朝夕の誦經を多くし天宮
の功りめなるは誦經より向よりよき之二人を
お朝より調子持の事守くよりたより其經と
よ朝より横十字の字之紙に紅毛紙と等しく
紙より面摺れ紙摺之三枚隔り佛に画像
表紙はなるは一皮より天鶴紙とさせ書三寸程

幅寸程厚さ一寸程とせし

一右より左角に作りたるは木とむき色紙を
えより右のものと揃みたるはくより額面と肩
胸より書あり高く頭と垂れ枕を於中三枚隔り
尤立門より作りお飾り手紙とせし

押入此れおのいたし方深家の後と合と此れより
自ら十字とせし本編と候と考ふし

一諸法の子新儀書おのりより一巻に八七日程
の内報りせし一巻に佛祖の忌日なるは

永按リ「彼邦にて現世の求福消災如意吉祥寺ヲ祈シトハ大見エ符咒の類西洋書子見ユルトアレトニ
 三六左道和蘭書ハ「バイゲロ」教ニテハ用サレト見エ
 一葬祭の儀を奏し御送りの式多しト大むは日本
 の風俗此如くト皆山野を葬る火葬多しト云々

漂客の法々々々

一点ハ阿比と易卦とトみ拾の事ハ如し人おまの
 所と又教多し阿比しトイニトヨト若多と所と又教
 事と知トやト夫人と相しトたトをト云ト云ト

永按ニ西洋アリト占ノ一種和蘭ニテハ「ホレセツケル」
 トニフミノアリユレハ島ノ飛ヲ見テト志ト出トヲ知ルト術ニテ
 古ニハ西洋地方多ク行ツカリト云トニ梅花心易ニ云風
 覺島ノ古ノ類ナラン易卦ハ彼ニ傳ワルベキヨウナシ又星
 ヲ觀テ占フ法アリユレヲ「アストロロジア」ト云其中ニ種ヲ
 分ツ和蘭書ヲ攷ルニ其一ヲ「ナ左ル」キトハ「フコ」天
 然ノ彗ニテ星氣ヲ察メ年ノ豊凶ヲ知リ耕織等スベテ
 人事ニ益アレトヲ考フルノ術ナリ其一ヲ「バイゲロ」ト云
 ハ「三六左道」ノ彗ニシテ星氣ヲ察メ人ノ吉凶ヲ言フノ

術ナリ此術亦古ヘノ世ニ行ナリ由昔シ星象ノ學士
 選馬ノ向チテカリス帝ノ暴虐ナルセヨノ後カ釵ニ成セン
 一ツ知リ又ヒレカ危ラ大ノ食フ一ヲ知ル又カリス帝ノ生
 ル時其母星象ノ士ニ問テカリス後必宝位ニ登テ母
 フ害シ其後遂ニ終ラ全フセサル一ヲ知又厄勒祭巫
 ノ星象ノ士其帝カアナスタシウスガ雷ニ撃手ルヲ知
 寺ノ類彼古書ニ多ク見ユ然レ氏其モト左道虚無
 ノ事ナラソテ今ハ廢メ用テ少ナリトイフ
 人相ハカヒオニヨミアト云專ラ人面ノ中ニテ額ヲ相スル
 ラ主トス又キヲ相スルヲトイフ

イフ 近古ノ賢哲

一 類多ク言ハハ多ク虚誕ニアラサルベシ
 究メ兼テ人相ノ學ヲ極ムト云フ一見エタレハコレハ古ト
 司エリウス、スカアリゲル文武醫藥天地窮理ノ諸學ヲ

一 魯西世の法普く諸邦に流布シテ 佛部フツ祭事サス子コノ
 信傳し地野チノ斯ストイふ都ツに堂塔と建立し其多し
 此五往古ハ邪法アリ以テ今魯西世の法アリ傳
 して治平ニ義アリ右邪法ハいハズ法と法とむ
 其也んと尋ね問ふトイフ 其意分り以唯古代ハ

邪法逐ふ行れぬる代に法は傳へたるし
 一 清教をよぶ 當國門を傳佈して 山高に 僧徒を 勸進し
 魯西より 門徒を 俗人と 徒徒し 地持して 毎々十二
 月 祈禱の 大祭を 行ふと 報り せよし 此 法 事 として
 フニキと云ふ

永 根 子 フ ラ ー フ ニ カ ハ 和 國 人 書 コ ン プ ラ フ ニ キ ニ 依 魯
 西 亞 ノ 大 祭 日 ノ 名 ナ リ 昔 國 都 モ ス ク ン ノ 大 鐘 未
 タ 地 ニ 墜 ス レ テ 宝 塔 上 ニ 懸 ケ ア リ 時 此 祭 礼 ノ 日
 ニ ハ コ レ フ 鳴 ラ シ ヲ リ ト イ ヘ リ

- 一 諸國の神佛と答徳を於沙汰をすよ
 - 一 アルメニヤ國 だの頭と神と答る故悪法也と云ふ
 - 一 ハホメーテ國 前々おかし
 - 一 五リイホ國 融夷の如く山川木石何れも皆神と云ふ
 - 一 應帝聖 至佛木佛おとす之日天を答るる故貴く云ふ
 - 一 アラヒヤ インデヤ子似く云ふ
 - 一 バリシ國 日天と答るべくし海にさゆと云ふ
- 永 根 子 フ ラ ー フ ニ カ ハ 和 國 人 書 コ ン プ ラ フ ニ キ ニ 依 魯
 西 亞 ノ 大 祭 日 ノ 名 ナ リ 昔 國 都 モ ス ク ン ノ 大 鐘 未
 タ 地 ニ 墜 ス レ テ 宝 塔 上 ニ 懸 ケ ア リ 時 此 祭 礼 ノ 日
 ニ ハ コ レ フ 鳴 ラ シ ヲ リ ト イ ヘ リ
- 教ハ其モト「危勒祭聖ノ教ヨリ出タルモノニテ魯西

聖トハ同宗別派ナリ

「ハホメテ」
「ハホメテ」ナルヘシ「ハホメテ」ハ「モ公カク」
ト「共云フ漢ニ馬哈默又漢軍養德」共訳スユレ
中古聖制比聖ノ内聖也ノ人建名道教ナリコノ法
諸國ニ弘レリ「ハ」ハ「漢ニ」ヨリ「回」教トイフ其教天
ヲ崇ルラ次テ主トメ像ヲ設ケス 礼拜寺アリノ時
ラ次テユレニ請テ天ヲ拜スルトイフ

應帝聖ハ今時ハ「回」
總國都大莫回兒トイフ地ハ阜ヲ回、教ヲ奉ヒ

ヨツテ回々最盛ナリ又西洋及聖多默ノ教亦流行ス
エリイホ 未詳

アラビアハ志ク回、教ヲ奉スルナリ

バリーイ兵拂郎察ノ都地理斯ナルベシ
コレハ魯西聖

ノ教法ニ似テ一種ノ別宗ナリ

一 清朝

画像木像を多む斗ははるの天を
多むかたよりしる由とす

一 コンスタンホリ サリララタ イールサリム

此等のみ諸島聖ノ佛法ニお給し唯教の遠近
とす

い子解ス

永 樞ニ「コンスタンホリ」ハ「コンスタンシノポリ」ナリコレ
昔厄^ゲ執^シ祭^シ曲^アノ都ニテ魯西^ル聖^シノ教由^テ起^ル所ナリト
イフ

サリリハラタ^ニ未詳

イ^ニレサ^リム^ハ如^シ德^テ聖^アノ都「エレサレム」ナルハシコレハ

魯西^ル聖^シノ教ニ似^テ別^ト示^ナリ

。經文^トヨリ^テ考^スル^ニ差^別

ヲホツホリ。ホミロイ。 魯齊^ル聖^シノ音

キリ^エレ^ノン「イ^ニレリ^ニリ^ム」ノ音 樞^ニ如^シ德^テ聖^アノ都^ニ在^リル^ニハ

右の經文譯をれハ^ニ義^ハ同^シ形^ハ異^ナリトシ

樞ニ^ハ遠^シ心^ハの音^カル^ル也^シ

一釋氏佛法の如ク檢到地獄といふ方便の沙汰ハ吾色

一前より異國人所持の仏書の内「ボホニテリ」と云ハ

祖仲の母^ノ其^レ畫像^ハ也^シ地^ノ祿^ノの圖^ト也^シ也^シ也^シ

其^レ外^ノ種^ノの^レか^ハと^カし^テも^ハ画^ハ也^シ也^シ

越^ス意^ハ問^ハわ^カら^ズ別^ニは^ハ奇^ニ怪^ナル^也也^シ

こ^トより^テ横^ニは^ハ字^ニを^テ讀^ムべ^ク也^シ

字^ハ此^ノを^テ示^ス

一 魯西堂の教の事と云ふ事あり 帝都をムスリムと云
ムスリムと云ふ事し 此れ旧都にして 近東建つた
の新都ハベルブルカと云ふ事し 又サンペトルルム
と云ふ事あり イカテリナ アリキセイウナと云

風説考アリカタリイナテ定まらり 女帝あり
カタリナと云ふ女帝あり カタリイナと中略し
云時ハカタリナと云ふ事あり 通まれば 疑くハ一人別名
カタリナハカタリイナ何れと婦人なれば 別名の時世
お遠じ書落の名は遠くをれハ此等の不修り依
て後の考の者記を 一 採り風説考ハ何
女の述る事あり

七 君ベアータラアリセイジュニ 年八十六 崩中即ヘーテル
ヘーテルイシの男形り母ハイリサフトロウナと云 凡後考
ハエリサフトあり ペーテルゴローの女也と云り 疑くハイ
リサフトロの事ハ 疑れ ペーテル イナ ペーテル 子也と云
て 風説考の エリサフトと云 ペーテル の子也 兄弟嫁を疑謂
れ 多し そと細と問人 と云れ 通年 ハ但云 云 云 云
疑ハ 中 と 記 す
イカテリナ アリキセイウナ 先表 して 嗣子 ハウロ ハフトロイ
シ と 云 く 像 位 ナ 是 今 帝 アリ 是 終 る 高 曆 子 七 百 ハ

十六年三十二皇后ナタリヤアリキセウ十一年ニ崩し
 皇后マリヤビヨリトウナナニ男一女ナリ 嫡男アリキセ
 パーローイニシキ七百七十五年ニ生 留西午
 年十二次男ニシゼンパー
 ヲロイニシキ七百八十一年ニ生 留西午
 年六 三女アリ「アリキセ」
 パーウロナ「千七百八十三年ニ生 留西午
 歳四
 都者彼等の令帝崩まれの皇后位し 后崩まれの嫡男
 位し 即位の至るまでの位他まれの次男三女
 其の家門の内も即位を承るもの多し
 永徳・魯中興・近代の帝系和蘭記録之所ノ正

史ヲ考フル左ノ如シ

○「ペテルアレキシナン」

「カタリナアレキシノウ」

「ベテルアレキシノウ」

「アレキサンダー」

アレキシス一帝ノ第三子ニシテ彼國中興ノ大聖
 主也 故ニ尊号ヲ加ヘテ「ペテルゴローチ」トイフ
 ゴローチハ大尊号トイフ義ニシテトモニ「カトリクス」
 國ノ帝「アレキサンデル」以來大徳英雄ノ君
 王ハ此号ヲ加
 ヘテ尊号ナリ
 ペテル帝ノ后ニシテ大徳アリ帝ヲ輔ケテ國ニ
 功アリ世ニユララ尊号テ「カトリクス」トイフ
 去ルニ仁徳ノ女主ト云義ナリ「カトリクス」
 祖メ後継テ「カトリクス」トナレリ
 ペテルゴロオテ「カトリクス」トイフ
 子ナリ太子トシテ「カトリクス」トイフ
 三帝ノ遺詔ニヨリテ「カトリクス」トイフ
 三年ニテ祖ノ子ナシ故ニ「カトリクス」トイフ
 ペテルゴロオテ「カトリクス」トイフ
 初メ「カトリクス」トイフ國ノ公ニ嫁ス後「カトリクス」

リテ彼国ヲ治メタリシガハペテル第ニ世ノ
帝祖ノ嗣ナキヲ以テ國人迎テ皇統ヲ嗣
シム亦英雄大徳
ノ帝ナリ

イハン

又ヨハン子スルイフ上ニ云ク帝コアンナハ所カカリナハイハノウナケ
キコアンナナル者入ルルニエケレニノ公子魯西亜ニ在テ貴
官ヲナセル者ニ嫁メ生ム所ニ年僅ニ國威ニ滿ガリシガ上ニイフ
キ帝祖セシニ因テ其母コレヲ三テ帝トナシタリ而シテ其國政
ヲ擅ニス故ニ國人服セスノ其次年ニ皆會議シテコレヲ廢シ
其父母ト氏ニナレハハ城ニ遷メ下ニ云ク帝ヲ立テリ

カリサハト、ペトロウナ

ペテル、コロオテ帝ノ少キニ即上ノキ帝カカリナ
所生ナリ亦大徳アルヲ以テ國人コレヲ推尊シテ帝
トシ即カシム此帝不化ニメ子ナシ故
ニ其姪ヲ立テ位ヲ嗣シム

カカリナ、アレキエウナ

初ノ名ハコノカ、アウグスタブリデリト云
入ル瑪泥亞ノアレハルト國公コキリスチアン
グストスノヤナリコレヲ第ニ世ノ帝ニ嫁スル
ニ及テ魯西亜ノ教ヲ受テ今名ニ改メ帝祖

メ位ヲ嗣テ
キ帝トナル

此書ニ云フカカリナ、デ、テ、カ、リ、ナ、ト、アル、コ、テ、カ、リ、ナ、ハ、和、蘭、語、ニ、テ、第、二、
ト、イ、フ、コ、ト、即、上、ニ、イ、フ、キ、帝、カ、リ、ナ、ニ、對、シ、第、二、ト、稱、ス、ル、ナ、リ、魯、西、
亜、ニ、テ、ハ、コ、エ、ア、テ、リ、ナ、ト、稱、ス、今、時、見、ル、所、魯、西、亜、ノ、錢、貨、ニ、キ、キ、帝、ノ、面、貌、
アル、モノ、傍、ニ、モ、コ、エ、カ、テ、リ、ナ、第、二、ト、記、ス、リ、エ、ル、夫、大、夫、ヲ、謁、見、セ、レ、キ、帝、
ナ、リ、寛、政、丁、卯、ノ、冬、彼、曆、元、一、千、七、百、
ノ、冬、二、十、九、歳、ニ、マ、祖、ス、ト、イ、フ、
年

一 曆元の年、當曆千七百八十六年、當帝祖業より、の年
曆より別々七万零二百五十四年より、終るまで
長くハ魯西亜開闢より、の曆終るまで

永曆十曆久ノ、一、丙午ノ、歲、一、千、七、百、八、十、六、年、ニ、
歐邏巴海中嶼草革命ノ時ヨリ、ノ、年、号、ヲ、ニ、テ、歐邏巴

地多り千七百八十三年の守護人ホルタホリイチッポ
此ハソ姓ハカホル名ハサリイナ其アホウシムハ字略
ん

母ハ此考者ニモカケリ本編異同命名の記ヲ詳
カキ且此姓名を記せるもの依名の誤り有之

凡説考ニホフチカイリモラホリイチナモ多ク疑クハ
カッテのニ字ハ表語をんり則表音ナカリ六ナリの
もニ多ク通テ通事の表方言ナクあるを念より
此人能て今時イラシヤウロイニペンチント云クオホ

別の守護人ノ凡説考ニモフリトテ所引書評と疑
カルクハ此人をんりベダナガハ其の連枝モオホ別の
守護数多の由此人檢官たりしオカハサカハ廣大多
みより一ニ檢官部なる故ナラシムト云フラスイモ
之モ進を重し其方の名もノ獵虎砲お子海海し此ハ
チヤウキナトシテ其ハ其方多クナリト云フエカホイ
ニエハムトシテ其モ重キモ進職と云フナリハ其地ノ辭
ヤウキナ一の古名言語実なるト云フ此地の辭

地ハ此説ハハれ多なるナリ官職ハハハ審し

の遠くは多きなり

アラカン^ニあし通事^ノ可なり

一此^ノキヤウキチ^トいふ地ハ亞墨利加^ノ境也^{其地北多時}

北海船^多のわたり^{なり}故^ニ産物^少夫^ノ故^ニ模^カ西

葛^ト社^トより^いつ^テ商^ノ船^トより^持返^ス産物^外洋布^等

の故^ニ水^ヲあめ^テ貿易^ス東^ニセ^シ地^ララウス^ト也^也

之^ノ大洋^ニあれ^バ通^リま^ル事^ヲ能^ハま^スか^ニ産物^ハ

へ^ツソ^イ白^ク毛^細なり^モ柔^ク色^白し^上凡^ノ物^也なり

ラ^ンン^ニ産^物あり^{日本}地^ノ産^物と^連比^角と^隨ひ^し毛^短く

厚^シ出^産物^トす^て美^好之^如角^ノ色^白く^くめ^るなり^也

白^鹿角^ノのみ^し大^多く^ハ鹿^角より^シ牛角^ノ格^ニす^べ也

据^テ女^鹿も^多く^産産物^を清^人則^鹿等^ノ物^也

札幌^御製^本集^洋あり

ホ^イメ^ラン^ニ産^物あり^等の^出産^物を^多し^何れ^也

と^ハナ

一イルク^トコ^イ 此^多華^也乃^チ市^港より^シ富^饒の^地なり^也

港^也オ^ホフ^カ川^以田^々く^繁華^也なり^也イルク^チ也^ハ

一若^シ多^ク土^地の^トシ^シ里^民未^ダの^事ハ^未知^ス也

イルゴフコイより唐土一陸地十日後遊索の如き交易の賞
実ハ往還古十日程

交易の商人分れハ是と云く里数の遠近と極められた

押上 夫太史仙堂漢氏お在るヤーイルゴフカおれり

此後本編に詳し

子ルセシスコイ センボロフエシセーサラート

風後考 子ルシキニコイと云はり

は白^{不詳}諸^{不詳}此ハ子ルコイゴロトの古漢人の古陳^{不詳}唐

土の守と為務し金銀鉄等の中と達多^{不詳}魯西亞

第一の豊饒^{不詳}の^{不詳}セ^銀ボロ^{二四二ハアトマリ}ラ^{二四二ハアトマリ}エシセーサラートと云

ハ子ルセシスコイの令銀山と云事也

地^{不詳}越^{不詳}ハ西金山東金山と云事也^{長城の事也}是^{不詳}云^{不詳}ん^{不詳}此^{不詳}ハ

よりハ唐土二日後の^{不詳}極界のケレボシ^{長城の事也}

此の邊子^{不詳}キヤ^{不詳}フ^{不詳}ト^{不詳}と云ハ交易^{不詳}カ^{不詳}フ^{不詳}は^{不詳}其^{不詳}の

民皆繁^{不詳}く^{不詳}わ^{不詳}の^{不詳}異^{不詳}道^{不詳}の^{不詳}外^{不詳}ハ^{不詳}イ^{不詳}カ^{不詳}ウ^{星高}今^{不詳}ハ^{不詳}通

極^{不詳}

アスツラハ

方^{不詳}山^{不詳}地^{不詳}名^{不詳}考^{不詳}ハ^{不詳}西^{不詳}斯^{不詳}德^{不詳}辣^{不詳}罕^{不詳}と云^{不詳}フ^{不詳}ハ^{不詳}凡^{不詳}後^{不詳}考^{不詳}

よアストラカシ北高海のお溪へと今此地緯五十二度モス
ユーピア子属守と有り

抑も此條は同必きゆ遠き多り之く且止けて書る
取れし解しよる事多し土地必極名書のわ
よとりてハ傳書の傳りよかたを以てするハバイカラ
ハ并カ湖を之し此れハ「カシク」に近き湖
水より星若海にありハ「カシク」のチ本編に
詳しき星若海ハ西番の地は多しハ「黄海」に
源あり西番の界と能きハ「極」あり遠く

且通船をよのりてハ

寺の船多し又聖原ハ傳書の誤り也西上フロハ巴の西の方ハ船多し

をよし形れよ、道の甚遠也、亦しく知れよし

一「ラ」ロシヤキ「エ」アと云ふニ此を以て之れハ西ハ「欧」

巴南ハ「ロシヤ」と云ふ地ハ此説未審又西細亞、西墨利加

一島ハ西番を以て故に「エ」アと云ふハ「エ」リ「ロシヤ」と云ふ

抑も此説尤も又ハ「キ」タイ「ス」廉と云ふハ「キ」タイ「ス」

サ「ル」スと云ふ

抑も「キ」タイ「ス」ハ「契丹」なり、此解本編に詳し

北東のまじとシヨム又地球のあまは塔意西葛と上
あつてり一疑くいあれがらん物れり、地方執権子
遠く隔りこれい同地名を聞つて依り此方書に
まじに記しなく地球の名、知しなく後考を依り
キタイスユイ、パイキン、北東、ナンチンユリ、ワン、チヨバ、等の
地名をこのふ此地名を万山地名考子、有命をこれい
まの記を中昔の記、今の法より、聖細虫の内を
攻め討ん、こて大軍と備をまじと異西臣の帝位、
なく不可なり、我より言し、この廣まじとふおや一、
「チギリ」とおまは何を、まじと敵せんや

「チギリ」とおまは何を、まじと敵せんや
按、チギリは軍器を司る士なり、と樂と奏し銃炮を
放つるもの成司る士なり、又軍卒の士の熟練を
いふ

「チギリ」とおまは何を、まじと敵せんや
ハシ、チギリのまじとを、まじと敵せんや、まじと敵せんや、
和睡を、調へ、ニツの園を、まじと敵せんや、まじと敵せんや、
産物何よまじと敵せんや、まじと敵せんや、まじと敵せんや、
菓種の類、其外諸物、之代物、い、皮革、馬、羊、皮、の、歐、亞、巴、
の、産、の、干、魚、の、類、なり、まじと敵せんや

按之五略交易物の中大略本領之紀綱也

永按之北高帝と彼レハシト多クハ支那の書ニ

載キテ汗を多クシ汗ハ韃靼語也君長ヲ稱

ナ汗ト云モノアリト見エ今ノ清朝ハ韃ヨリ起リ

タルモノナルエハニ和蘭及魯西亞等西洋諸國ニテモ

ツカニメハント稱スルナリト見エ和蘭ノ書ニHAN

又 CHAM, CHAN, KAN, 依リ

元朝ノ始末ヲ記セル西書ニ元ノ帝ノ名ヲシギスト汗

元太祖尊号ヲオククタイカニ太宗ノ名イエウカン定宗ノ

成吉思ナリ高麗台ノ名

ノ類ナリ又西書中ニ清ノ康熙ノ像ヲ畫キタルモノ

下ニ CANHI 廉熙 一名 BOGDI CHAN 記セルカニモ

コノ汗ナリ

按之魯西亞ノ支那ノ戦争及シテ盛京通志龍沙

紀畧等ニ詳ナリ西書ニ略説スル所ヲ見ルニ清ノ順

治中ニ魯西亞ニ名北京ニ使ツ遣ヌ康熙ニ至テ聘

使益多シ而ルニアモル河漢ニ云ニテ真珠ヲ採ルト又其

辺ニテ紹ヲ捕ルトトニテ兩國ノ人争ヲ起ノ支那ヨリ兵

ヲ遣メ魯西亞所築ノ一里詭江ノ辺ナルコアルバシト

イフ城地ヲ攻ム ユル通志等ニ シカレニ魯西亜ノ帝ユレヲ聞テ

絶遠ノ地ニ兵ヲ帶メ人民ヲ役スルヲ欲セス因テ興城地

ヲ支那ニ贈テ和ヲ議シ康熙廿八年ニ其和遠ニ成テ

カアルゴン河ヲ以テ兩國ノ界トシ分界ノ碑ヲ建テユレヨリ

今ニ至テ兩國聘使及商賈交易年々絶ヘスト云々

今支那魯西亜共ニ其勢極テ盛ナリトイフに支那ハ其

邊疆ニ争フコトダニナケル敢テ其威ヲキクメテ

ノ北ナル嚴寒ノ地ヲ侵スニナク魯西亜モ亦其西方

歐羅巴諸國 都兒格 百兒 西亜等ハ時々事アル

緊要ノ重地ナルハ此モ要害ヲ嚴ニシテ他國若シ乱ルハ

コレニ乘メ國ヲ拓クコトモアル氏東方ハ其帝都ヲ離レテ

極テ遠クメ旌竿ノ末執ナル支那ト好ミテ結ニ貨物

ヲ交易スル其最願フ所ニテ絶遠ノ地ニ兵ヲ帶メ支那

ノ境ヲ侵スハハナキナリユレニ因テ二國共ニ和ヲ主トセ

シトトキユ

ユノカアルゴン河ノ辺ニテ漸ク南ニ向イテ魯西亜ヨリ侵掠

セシナリユレ近昔時ハ何レモ属セサル諸地トビリトト呼

ヘル總國ナリ百有餘年來支那北疆ト界ヲ接セル國ト

ナレリ其本出ハ元ニ至テ絶迹ノ境ナリ

一ポーフラ

獵虎トシテ多ク其の夫人漁也云々
カキ共ニ旺産あり之類左に皮ニ干柱移あり年
と云サイニムラフ上ニシテ

唐土の交易此品を以て 上ニ獵虎皮を移り付

木綿の云々及中取ハ百反ト云々ハ八十五位ハ尺

と云獵虎尾トシホースト云々ラフケ陰蓋トウイシト

ハ暹羅國のタケリト云々海虎鹿

子リハ海豹 ヨーセテ暹羅國ニウリ海虎

皆此處ト云々産するもの故也何れハ唐土交易

の和云々

一ヌマフイ 「解」オストロクハ 与り云々ありおも生ニ生論あり云々

大風波の事浪ヲ打も石也金也ト云々生論あり

りト云々云々云々細氣深る全氣云々ハ

云々云々云々ハ云々云々の類ニ送るト云

一カムサスカ オホーフラ 海ノ底ト云々日本の底ト云 上

民の負たれハ他ニ容易ト評云々帝教積み送る云々

一レト云々左河云々 魯西密事フの川ニ云々次ニアモル風

考ニアレルとあり
按テ里龍江

此河流の甚ハ四時東に凍く通船可
河原の方其川内より大船数艘と繋ぐと又川の
廣大なるあれと云く堆疊を去しと云

一船底三十片即日本曲片七丈此舟者船路六十人余と

いふ

但東流の川幅七十正スリ

あれ日本に数十九里十片下ニ
あり船底量の河は洋

ある事ハ其條の略ニ
里龍のばあに記す

其途より

三十日と俾れハ川幅八正

ス又二里八丁

又三十日せられハ幅百六十サセ

日本に数
三十三片

途より正レホレンスコイカニサス上等のあり又Pモルといふ

川ハ魯西並に唐土の堺より大船と通流の東流ハイル

リフコイ。ニルゼンスコイ、通流ハ河原ハ唐土にしてキヤイ

一フタ 此方の中の地を流轉す

正子セスカの川ハバイフウ バイカよりイルリフコイ 子地の地

子 此註未詳 旨何利牙 疑ハイルコフケヒ 半異 イイ 讀めハ 此の納言の翻譯を 流 イルコラ 云川 有合

ラセコウカ ソノ 小川流れ 流 流 ハ 河名正子

セスコイ ソノ 又 流 流 ハ トル 正 コイ の地 入り 諸川と

合 セ 大 河 是 ハ 名 有 ワシ リ スカ 云 流 轉 一 イ セ

正 子 キヤ シ 一 ハ 海 ノ 名 有 一 ハ 帝 城 の 川 の 名 モ ス

子ル、セシスエ川、あれハ、エルチヤシリカの二川あり、又トボリスエ
イ、ソ、あ、あ、子、イ、ル、シ、ト、ボ、の、二、川、多、り、
瓜、説、考、ト、ボ、ル、ス、カ、ヤ、ハ、ア、リ、 瓜、川、の

名、多、く、其、の、考、ア、リ、ト、云、

カザン柳、山、地、名、多、り、ト、云、 瓜、説、考、ト、載、セ、多、り、

アスタラハコト、カス、ト、ス、エ、イ、
子、瓜、説、考、ト、カ、ス、ト、云、 瓜、川、ウ、カ

ト、ソ、ム、ゴ、ロ、ト、タ、ラ、ハ、ン、エ、イ、ス、コ、イ、
ト、ソ、ム、ト、云、

万、西、地、名、考、ト、大、陸、經、多、り、柳、山、ハ、北、東、の、帝、と

不、エ、リ、ハ、伏、怪、す、ト、ソ、ノ、事、の、考、を、イ、ハ、ミ、ト、云、瓜、

西、亞、漸、く、諸、島、と、指、怪、ト、云、瓜、の、考、を、イ、ハ、リ、コ、ロ

シヤ、ト、云、瓜、説、考、ト、云、 ト、タル、ハ、ハ、瓜、帝、ト、云、

ト、云、瓜、説、考、ト、云、 ト、云、

正、十、ト、云、川、多、り、瓜、海、オ、ホ、ー、ワ、カ、カ、ム、サ、ス、カ、の、邊、通、ル

の、船、ハ、多、く、瓜、説、考、ト、云、

正、十、セ、ス、エ、イ、ト、ボ、リ、ス、エ、イ、の、考、ト、云、瓜、ヤ、ト、云、

瓜、ヤ、ト、云、瓜、説、考、ト、云、 ト、云、

と、記、す、

春、ケ、ル、夏、ヒ、リ、秋、ア、ル、冬、ウ、ク、一、子、ヤ、ニ、ボ、ロ、三、ボ、ル、四、カ、ル、ボ

五、ク、ボ、六、ユ、セ、ト、ロ、ハ、イ、モ、九、エ、ソ、十、カ、ル、百、ソ、ン、千、シ、カ

より 蘇子 湖 (ギヤールランススコイハルホース) の地と云く

北海大洋 子 也 (ゴロータラハンスコイ) 子 湖 (コラ) 子 川 子

河源 子 湖 (ラートカ) 子 湖 水 (風説考子ラートカ云地誌の云

人子 又 風説考子 湖 (コラ) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

東北 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

流 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖) 子 湖 (子 湖)

多し尤重なる所の遠ひ多しと思はる彼地述ふ
と地をみれば其の関を多なるをみれば其の地は
よ由なるを思ふなり但に其の地は通事なるを
あつと云ふ事ありしに感あるのみなり

永 和蘭ノ書ツク按ズルニ「エニセア」河み「エニサイ」ト云フ
モノハ韃靼ノ「キルノセン」ノ地ヨリ出ツヌ「トシグスセ」ト云フ
アリコシハ「バイカル湖」ヨリ出テ「エニセア」河ニ合シテ北海
ニ入ル

帝都「モスクウ」ニハ「モスクウ」チグリノ西河アリ「トボレスキ」ニ

「チス」トボレスノ西河アリ「アスタラカン」ヨリ北高海ニ入ル河ヲ
富ル河ト云

永 按ニ北高海魯西語ニ「キエレンス」モ「海」又「カス」ニ云
モ「モ」モ「海」ト云フ「キエレンス」カスニ云フ「ハ」ニ

其海邊ノ地名ニ

「トイフ」川有リ河原ハ大國ニテ「ラト」ガト云

永 按ニ「ニ」ト云フ河アリ魯西語ノ「ラト」ト云フ湖ヨリ
出テ「イン」ノ地ヲ過キテ今ノ新都ナシ「ベル」ノ名
「ベル」ブルグニ至リ「ワシ」リウニイ、オストロウ等教箇ノ島ヲナシ

テ「シラントセ」海濱ニ入ル

地述ノ圖ニ包得河トアルハ東北韃靼ニアリ 雪際シユエシヤハ魯西

亜ノ西ニアリ 大國ニ昔ハ其勢盛ナリシカハ「ル」ヨロオテ

ノ時ヨリ魯西亜ノ為ニ大ニ破ラレ其後又其國ニ嗣ナクメ女

帝「ユリ」共トシノ姪ヲ立テ王トナシ魯西亜ノ法教ヲ受テ

「サ」ロケレボシ又ベケレボシトアルハ「サ」ントベルブルク又ベテルブル

クノ音ヲ轉訛シテキタルナリ

一 里程おと度量をももろしと尋らよ

一寸エルシヨリ 日本曲尺五寸五分之ち收外四寸五分

センチと云四寸五分 日本曲尺五寸五分 是と云五分一リ 亦尺五分

シと云 備布と云 曲尺 日本曲尺五寸五分 五寸五分

しと云 日本曲尺五寸五分 五寸五分

と云 日本曲尺五寸五分 五寸五分

と云 日本曲尺五寸五分 五寸五分

と云 日本曲尺五寸五分 五寸五分

行程里数と量智すし

按て本編里程尺等の記と後考を爲し

ニ海上の行程 日本曲尺五寸五分 五寸五分

船中より細 日本曲尺五寸五分 五寸五分

知りたしき 妙玉まをひく 答へ何れもまをひく
 さしあふし 但偏に日本の細引と云ふ物のあはれ千ヤシリと云ふ
 沙の遠遠凡の強弱大概と云ふ切らし 一の海上を以て知れさせよ
 係りおぼし大凡を云ふ 玉まをひして用ひさせよ

地夷地付名を云ふ 魯西亜國の地と行能大勢矣
 人の量知したるを記すを云ふ 人のあし

- 一 本版夷地付の三カ
 クナシリ島 海上 六十五エルスリ 日本里数 凡松六里
- 一 クナシリ島 海上 二十一エルスリ 日 同五里程

クナシリ島周囲八魯西亜人未知也 量数知れぬ
 に載せず 今なき人の大勢を記す物也

- 一 エトロフ島 海上 六十五エルスリ 日 十八里程

エトロフ島 周囲と前同し

ウルフ島 周囲百五十エルスリ 凡四十一里程

- 一 ウルフ島 凡三十一里程 日 八里程
- 一 千リホイ島 凡二十五エルスリ 日 九里程
- 一 マカシル島 凡五百エルスリ 日 百三十八里程
- 一 シモシリ島 凡九百エルスリ 日 二百五十五里程
- 一 カムサスカ島 凡四百五十五里程

- 一 カムサスカ島 凡八百エルスリ
- 一 オホフカ島 凡八百エルスリ

一 オホフカボ 三千二百七拾五ノタ 日 九百九里餘

イルククエイニ 地方の大略 五葉の鹿傳國二枚ハ外餘 魚西虫人 物語 言談佛像 寺園画と一綴ニシテ 亦上に有ク

○ 蝦夷地東北の諸島 下口 亦略ナリ 先列ノ島上地名 夷人ノ傳ハ 亦と 近世オロシヤ人 注名等 亦有ク

一 表名 下口 亦島 魚西虫改名 オーセムナフサイ 又アテエソナフサトイ

按ニ オ、セムナフサイ 魚西虫言 十八ノ 島ナリ

一 日 ウルツフ島 日 セムナフサトイ

按ニ セムナフサイハ 十七ノ 島ナリ 魚西虫言 十八ノ 島ナリ

一 日 ミカニル島 日 セラニ

按ニ 十六ノ 島ナリ セラニ 此傳 傳ノ 語リ

一 日 シモシリ島 日 セスナフサトイ

按ニ セシナフサイト 十六ノ 島ナリ

一 日 ケト井島 日 ベウナフサトイ

按ニ 十五ノ 島ナリ ベウナフサトイ

一 日 ウセシリ島 日 セラニ

按ニ 十四ノ 島ナリ セラニ

一日ウラシヨウ

日 テル大イワサトイ

一日ウシヤウ島

一日ウクハケ島

日 テ正ナフサトイ

一日ウクハケ島

一日モトウ島

日 オリシナフサトイ

一日チルシユタン島

一日ハルヲミユタン島

日 テンヤトイ

一日テ正アトイ

日 テ正アトイ

一日ハルヲミユタン島

一日モトウ島

一日無名島

日 オシモイ

一日ボロモシリ島

一日無名島

一日ウシヤウ島

一日ウシヤウ島

日 テ正アトイ

一日ウシヤウ島

一日ウシヤウ島

日 テ正アトイ

一日ウシヤウ島

百遠の阿かまや

一日 無名島

四 奥ノオレトイ

按子セララレトイ未詳四多れハコチヤテトイトヨ

一日 無名島

四 テレトイ

按子テ六ニ多リテレトイトヨニワ目多クソコ

前後のテレトイ多クソコ

一日 無名島

四 フトロイ

按子二日ロワトヨコイセソコトシテ此第

ニ多クソコ

一日 無名島

四 ホレセレツカ

一日 無名島

四 エラエート

一日 無名島

四 カムサスカ

按子カムシヤフケとシテ多クエトロフと諸島共ケテ之仙名

諸流人の伝ハ彼人の伝ハハカニシヤフケ

ヨリ共一島ヨリ第十八日ある島とハ彼領

ハエトロフと多ク第十八日ハウルツコトモシリハ

ハエトロフと多ク第十八日ハウルツコトモシリハ

に別トシテ多ク第十八日ハウルツコトモシリハ

但その後あるよりよき人の中遠くまで遠くまで
こゝろをよこし、**カミヤツケ**の夷人の通称をよる由右島の原形
詳り近多氏遠多命界國考より見たり参考
を多し昔より夷船夷三十八島ありといふ
此島々のうち多々なく「カミヤツケ」といふ全く日本属
島といふものに御より按八日なり、**替船**をいふハ
遺恨といふ多し

嘗て矣上民の役とせく、「カミヤツケ」の教言、**乳肉**
の系也昔ハ**カミヤツケ**と製して食料とせし
故に我々吾西要より我々保年名は不徳とせし
改名して「カミヤツケ」といふ由和蘭考の地島ハ「カミ
ヤツケ」又「カミヤツケ」又「カミヤツケ」といふ也右島「カミヤツケ」
カミヤツケといふし由近多氏の書より見る

右右島の名をいふと尋らるに古事本にありといふ
按これハ多岐の島といふをいふ
カミヤツケといふ島の名をいふはこれハ尋問し
カミヤツケハ夷方ハ**カミヤツケ**とせし、**カミヤツケ**の由を
夷言ハハ船夷地より、**カミヤツケ**の夷ハ散在をいふといふ

「カエツ、フカタ」といふ夷言は日銭「カエツ、フ」といふ日のおる方に
いふ意欲「ルムセ」に取幸なり」と夷人の後りぬあの名を
いふれよ 母と母の解 往古よりの際夷子紛れぬよ「ホロモシリ」
ラン子コリン、等の夷人の今皆魯西亜に属しあるもとすゆ
子魯西亜人の名けたる地名は近世ありたるなりし
母とあれ勿論なり
右の地名を最近「英子」のたわおいむを「イ」を近世
知るに便利なるよしと云々

母と此條未解

一 カムサスカ、近世にありける其の階夷子疑ひなりし
今魯西亜人漸くまり人を懐けし其の傾となりし新
し地名をなつたりある夷人「名とす」言語と教の既し
「ホロフ」島「モシリ」の夷人「イ」バ「カ」能くあれと「美」通系
ある地名を「ホー」ナ「シ」よ「イ」又「同」島「ナ」井「ホ」の夷人
「ハ」シ「ニ」ハ魯西亜製の表と看し「御」も「換」る「方」針「或」ハ
後「わ」り「お」持「て」あるし「船」の「造」り「も」「衣」履「の」製「わ」り「意」
存「し」あ「り」し「日」れ「ハ」あ「ら」ず「ハ」意「欲」なる「可」ホ「ロ」モ「シ」リ「シ」
「ニ」子「コ」リ「ン」の「夷」人「の」使「意」交「り」し「近」世「の」夷「人」の「他」れ「る

船を近地離棄の所持し多るに針釘と送り多る
 形は稍異なり此魯西亜人の指高は従ふ故に此等
 のりえと夷船の船板或は鐵板餘板おとすは
 り多しもの形ふも今も此中にあり行きしと川の河
 上りへも幸し多るを魯西亜人持渡り物産大想上
 あり夷人たたく煙草亦は生金の末物と云々交易
 せし日本産の海扇ホトギスありあれを夷地へ渡り
 たり何れも河に流るなり又彼人夷人可し時と雲
 々のわのわ純子紗綾海草木綿更紗の類毛織もの
 程々細羅紗古海草の里人生糸尹物銅鉄の細工の
 皆と種も嫁れり美姑のものなりと日本より夷人
 渡り産物の離棄廻りえ別と下なりはがし物と
 心く彼を交易しまれり志るを近來の夷人自
 士の交易よりオロピア方の産物の上なり價高く日本
 産物の類下なり故に價高なる事と成り知事等は
 り相今世よりして日本より離棄種と別とす
 和語を習ふ事と禁し日本の風俗と見習ふ事とは
 然らず教へずるを離棄の是れなる格とす

なりあれ彼を為すは大利と貪人の為なり此地を
商賈の者のこゝに正む場所の故は品利欲のこゝに拘り
教育の乃こそいかになり夫故に其地より日本
の俗風と俗を中いかに疎きをなり近きも不願と在
せしオロシア附近の島方より物事海切に其地より故
近頃の多るなり切若きなり其土地といふ事此の地は
まことに是なり

一 魯西亜の風俗有り船と信言何れの方角より海
岸と重なり其地より何方より道なきに於
てなれは交易を取り得に終る事我なり恒格せし
むるよし又其地より往く土人愚昧し地を以て物と
言へく此れを懐け力と盡しく其物産と開き漸
そ地は商館と建てる遠きは其地より往く此れは皆
もし務めをなすなりと因て人々他方を遊行し地理
と究め物産と求むる事王上は告るを譽るし其
成功と賞せらるる事規模をなす事

探り深民の情を存す彼オランダにツケ物此れ
中

一ウレフ。島より大よびに遠くありて一島あり名をシコ
ケモシリ一ミウラモリといふ此地は猛虎多し産しおつと
せいあざむし。阿しう等し阿し又此地はカムサカカ
子ニツの大島ありと云はつとコニトルコイ此島産物あり
は回しく山は白熊と産し此島をおす此島はカム
サカトウの島に産む熊と云又此島よりシコケモリとい
明風をいふ海を産む熊ありと云常は雲霧深く
舟乗り物も少し故にシコケモリといふ所は自由
表言にシコケといふ虚といふを産む熊はオロシア人産すといふ
名けしと云一名ウラリ。モシリは表言に産む熊といふ所
なりと云理ありといふ

按て産の系未解 彼の人ありては俗信をいふあり
難むといふは遠くは地を開く人といふを産む熊といふ
此らの土地に産む多し海獣のこゝに我も風を産むて
は固く産むるに産むるは且て産物に欲せざるあり
これ山内と云ふ海獣といふもまれ先を産むるは阿し
海獣を産むるは意阿し人なり 彼を産むるは阿し
のこゝにこれ阿し人産むるの地をいふ常南島産物あり

コケモリ

・
がこれの空を隔くは地へを皆其要用と為す言
也これ務めて其和を求むる事と思ふは
薩長海豹の類は必ず其地氷海に多く産すこれ
造化の妙様を 穀類綿麻と産すは其地人衣
・
少島の造物主の恩徳に之し

一本 船夷地 ヲソラトソソラの沖子シコタンニモ多クあり
此大洋を隔くは一島ありしと云 按は古代地誌の
・
美近世の地是れ日本のも多し今銀桂三島の
の三地を以てし 疑ふらくは此島の島名ニシコタン

ユニシトリスコイ、ソソノイ、オ、ストロウ、等々人々此れは右
シコタンの島に無数の島ありしと云 今銀桂三島の外
・
は一島ありしや尤此三島は日本の属島と此れを
あんなる故に船夷の国なり 我属あり 即ち東に
西よりて其島あり 外よりては島の島
・
島を以て通称すは便に先を以て此アメリカの大海
有りといふは此島を隔く五十度の遠ありといふ
・
を以て我日本と玉將を多かり 右島と云今銀桂
・
銀物桂馬物等々あり 疑ふらくは此島の島名

按て我邦惟夷地と云之近來字業殆り多し何れ
か多遠洋倭島と云くよあは海よりくよの唐
くはるや

永徳子明ノ時刊セル地球圖ニ日本ノ東に金銀島アリ
コレ西洋ノ古説ニモ亦コレアリ然レ氏其所在未レ詳
ナラストイヘリ

日本ヲ王得ニ象リ金島銀島桂馬島ニカク
トトイフハ甚キ臆説ナリ地球圖文明ノ時所

刊モ西洋ノ古圖ヲ訳シタルモノ何ソ象棋ヲ象ルルコト
ニヤ且王将金銀桂馬等ノ名當テ徳ニハナキナリ
コレヲ以テ知ルベシ

一風説を聞くと花経各久之路を以て松ありと云く
筆記しおしたる書に南詔佐井湊佛日徳寺
千二百石積松七人彦何湊但し正親朝孫彦朝
の十同美戸村伊智各利八兼大野村七松宮古湊七
助伊彦存命の者女人オロニア云々玉りしと云れ
延享元年の頃のよし左の心持左馬若ハスクリハ
都

て銀錢二百枚を石籠にありたる由見えありて此
度彼主人女子尋子にお還るなりし此者オホーリ
とありし浮着し夫より帝妃の御座の銀錢と云
ふれ子細と尋られぬなり此者オホーリクワコイ
住居志るに由海に於今三人を命なりと云ふ人
レクワコイの由獲職成奉名不知 按て此頃の婦し母の徳
お母りベータラレラセイヤと名と改む彼千七百八
十三年 天明三年 命と請て海海の事と役を則
て男の子へイタラシ。セイヤの子年十七歳船頭七十

人乗りの大船をあつたりイルクケカお帆を 何れの
とてんすか尋ぬ
これハお帆

按てイルクワコイお帆を需しオホーリお帆を
此より舟破船してイルクワコイと云ふに云れり 船主人共

船中の刀鉞銀銅錢玉結布おの貨物と奪ひく分
ち取し船ハ火をかけ焼捨つるしイルクワコイの西海
アタリ井と云ふなり

近年若地子散在に於ておの墨玉若地の内紅毛船持
後りおとくし銀錢銅錢玉外毛船貨物お物お多

分此時分は多る程と云ふ美人は持徳の日本人
聊の交り易と云ふ為しと云ふ而今年迄毛髪の色は如
儒子純子海峽地唐本條更紗おの古也たお皆お切
まはつたての物美し銀細工の糸は二振銀錢お
顔お少くして美人おのお持したるはと價を賤
せぬを云たり

おれ子儂く破船の船子と尋るるは船中十人程は
該唯一つ外は口底と當り。〇〇〇〇其余二人は船
北の紀をい探りて又ペーラランセイイヤより上り

まし今年と云ふは穿鑿し尋ねぬと云し

按し此條解せず破船の船子と尋るるはふは美人
尋ね知りしと純く美人焼捨るれは船中おの
外お知る者もなしと云ふはつんせいイヤから上り
ましと云ふは不審かしと云ふれはオニセイイヤは
破船を危れ物と云ふは船中紙も此事一と云
せ考ふし

ツルツルと云ふ海よりしオニセイヤ人美人と色と透し
尋ね探れと云ふは破船の中

按てあれは後ツラハ海軍せしオロリア人の事
あれ固より夷人との仕事より何れ故より其の事に
其始末を語りて其の項に檢するに物取被服等物等
正口ホー^{正口}の夷人其の事と其集めたりとありし
當年にありし其の事と其集めたりとありし
其の事と其集めたりとありし
其の事と其集めたりとありし
其の事と其集めたりとありし

多岐

一當年にルコウケの船三十人乗但狂風と遭ふ故日大

洋に打ちよむ北海中一島ありと見え付るあり其島
形は鏡き溜り深きなりて碇を下しこれハニッソウリヤ
之唐土の北とカラフ山の島のありし松あり其ハニッヂウ
ありしオホーワカハ此トニルスタト是なりしなり

按てルコウケの船より其の事と其集めたりとありし
海の地はありしオホーワカハ此トニルスタト是なりしなり

志は向て其上人薪水無給ありて其村を去りて
船に北極の事ありし其の事と其集めたりとありし

帆と停む登しぬ者と待ちて交易の約諾とよして
物れありとせよあけれき居ると僅有僅有とせよ
此の折々右に記すも道の故はありありしとせよ
不法の事ハヨリましし所の之はフラスと云ふ海海の破船ハ
何國のはききしとせよあけれき居ると僅有僅有とせよ
燒捨られぬ考ふ處を據りしとせよ

一 風説考ヲ載セ多敷明和八年辛卯の頃ハンゴロゴン
ウカシ 幸何と云ふ船日本海と云ふり通りたる實名を
尋ふ子ベンゴロハ本名「ボリヤ」といふ其の考ふ處を
據りしとせよ

フウ「アウス」の語
写すに「し」といふとすし 先年オロシヤに因れと居る
肉種と云ふるも多敷船子ホフカカハサスの間ホセ
スコイセカアフカと云ふ一派刑をこれより然るに此れは
主の船を被後生此人幸何と云ふ者たるをアウスと云
ふハ船中の者皆我に悦び此れと云ふ船に離れ日本
東南海と通船し海帝郵海と云ふり本名は行く處
と云ふれ全く狼籍の事なれ徳士と云ふしめ船に
水まぬきせし船と云ふ横りお擲りぬる船と云
振舞われぬ役人の由ハセローフと云ふ者は中より悦び

ありてはる海ありイフコイラフ。と若る心せざりしるる言
端の帆と巻き糸おし南と志し是のシモシリラフコ島
の北キ
とつる島ハおる島の海深あるまじくせく船を寄せ新
水おの用意を志し若る心なる人イフコイロウ此お
より先きの船と志しし。のこしと押しし中おれハウス
彩の忍り候よくお死事生しお打おき沙濱有り控
をきお帳し。其の海あり而は後フランスヤの国瑞
部案ハテリ。地理と事よく看事国の若る志本國
国乎
一均着し右の始末おれ地理の程お詳ありお

主ハ此也。しる強し外事候ありし。と我もシモシリ
候り控をれし。役人の遠航者ラ候る本ありし
と一し言上せし。事討しなく。當時の事ありし
とし右役士二人命とせし。大船凡八艘は。今今
聖墨利加パナリカの島。海をさる。と候る。事ありし
と言あり

此の事。航者双紙あり。と下り。阿波ふら船を
寄せし。事あり。邊要分界國考中。子詳し
す候。せえ。候あり

魯西重國字草體様ノ四十二字

按ニコニ寫セルモノ字跡法ヲ失シ字音ニ片假名ヲ施セルモノ
モ必ス傳寫ノ誤リアルベシ

本編序例ニ三十七字^ニ并ニ體法字音共ニ詳説シタルハヨク
略ス

- 一 オ^オニ^ニツ^ツア^アニ^ニテ^テリ^リ四^四マ^マリ^リ五^五ハ^ハ六^六セ^セハ^ハ七^七セ^セム^ム八^八ラ^ラセ^セム^ム九^九キ^キエ
- 十^十ケ^ケセ^セ七^七ツ^ツア^ア并^并地^地刑^刑冊^冊五^五十^十ハ^ハシ^シ六^六十^十セ^セム^ム七十^{七十}セ^セム^ムシ^シア^アタ
- 八十^{八十}シ^シム^ムシ^シヤ^ヤ九十^{九十}ケ^ケテ^テ百^百ス^スト^ト千^千イ^イセ^セ万^万ミ^ミリ^リヤ^ヤン^ン億^億ヤ^ヤリ^リヤ^ヤン^ン兆^兆テ^テリ^リヤ^ヤン^ン京^京ク^クワ^ワテ^テイ^イ京^京リ^リヤ^ヤン^ン
- 一^一ニ^ニ三^三四^四五^五六^六七^七八^八九^九十^十

右彼國字十數字ナリ

彼人所言或僅し引きし教言

春 ハル 夏 ナツ 秋 アキ 冬 フユ 此の四のあはれをいふは

正月 ツキ 二月 フタツキ 三月 ミツキ 四月 ヨナツキ 五月 イツキ

六月 ムナツキ 七月 ナナツキ 八月 ヤマト 九月 クサキ 十月 トモヅキ

十一月 ユヅリ 十二月 ムラサキ

金 カネ 銀 ギン 銅 ドウ 鉄 テツ 鉛 エン 錫 シヤク

水銀 スイギン 赤銀 セギン 赤銅 セドウ 真鍮 マシヤク 唐真鍮 カラマシヤク 錢 ゼン

人參 ニンジン 桂枝 ケイシ 木香 モクコウ 丁香 チヤウキヤウ 甘草 カンサウ 樟腦 チャウノウ 明礬 メイラン

石 イシ 雜冠石 ザクワンシ 胡椒 コウバク 芒硝 マウシヤウ 鹽硝 エンシヤウ 硝石 シヤウシ

真珠 マシユ 莫大 マクダイ 海紅 カイコウ 松脂 シュウジ 霍香 クワコウ 舟 フネ 大 オホ 小 コ

人 ヒト 馬 ウマ 牛 ウシ 熊 クマ 鹿 カ 馬 ウマ 家 ウチ 宋 ソウ 大 オホ 小 コ

吸 ヒク 昨 クノ 今 イマ 明 アカリ 行 ユク 山 ヤマ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

鍋 ナベ 無 ム 杉 スギ 草 クサ 芥 カイ 山 ヤマ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

怒 イダシ 桶 バケツ 水 ミヅ 湯 ユ 服 ウヅエ 名 ナ 云 イフ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

不 フ 知 チル 何 ナニ 待 マツル 寢 ネ 起 オキ 呼 ヨブ 小 コ 刀 タガ 懸 ケル

櫻書語類ハ聞遠ニ字一後リアリトスル也本

・中ノ字ニ松ノリ等々ノ事ナシトシテ書ス

北邊探事補遺卷之二抄

林氏蝦夷紀事抄録

蝦夷ノ東海中ニ從來千島ト称メ圖書ニ載スルモノ三十
七島アリトイフ云々

按ニ三十七島實ハ其大ナルモノ廿一島ナリトイフ加
模西葛杜加一州ノミニテハ取り卷カスオホーツカトイフ
地ヲハ笑セハ取り卷キ長イフベシ

江元文四年己未御記録

六七月小由書抄記
按今其風俗ニ類スルモノ若干
先ヲ抄録シテ以テ考ニ備フル

其評ナルハ補遺
ニ其戸觀フ人シ

一 帆柱大カニ本ノ向一 本大柱ハ中流ニ立上下ニ帆
ニフ上帆ハ大ク上帆ハ小ク其ノ幅多ク柱ハ左右ニ
細引キ、柱ハ第一ニ小ク第二ニ大ク第三ニ大ク第四ニ大ク
政心一古上帆柱ハ中流ニ立今既先ノ方ハ立テ

帆何れハ本條ノ柱ニあるハ中ノ

一 普西亞船 旗印ナリヨ印ニテ直ニ波ヲルルハ知レハナリ
一 船ノ水ノ流ニ成物ニ張定ニ少クナリヨ印ニテハ不用ニ似テハ四方
一 物何れハ本條ノ柱ニあるハ中ノ
一 海ノ波ノ大ニ高ナリハ知リテナリヨ印ニテハ不用ニ似テハ四方
一 角邊ノ文字染カシ紋様多クニ艘共ニ同様

一 老何我六尺船柱ニあるハ物多ク南ノり多クハ

一 馬船 人教ナリ人ノ多クハ人教ハ其ノ故ニ

一 人ノ 赤毛ニシテ船柱ニ立シ身柱ハ事ナリ船柱ニ人
形地用物仕立ナリ身柱ハ事ナリ船柱ニ人
大カ九流一艘ニ立此船ハ大ク妙ナリ二艘ハ小ク

小見也

一 普西亞船 和蘭ノ中ト半フモノナリ
一 馬ノ船 人ノ多クハ人教ハ其ノ故ニ

一 船柱ノ形 船柱ノ形ハ事ナリ船柱ニ人

一 右ノ人教 人ノ多クハ人教ハ其ノ故ニ

抄の極言婦外厚き物云々の事
 又色ハ赤まより或ハ鼠色ハ
 大形毛皮と云ふ湖中の極
 一服引かゝる感と極のさつと
 人ナリと云ふ事
 如の如き事あるか

一 老氣人ハ極く遠く
 左徳一両唐人持行
 補 高成章ハ元文四年
 高成車ハ元文四年
 長三十尋余極
 長三十尋余極
 長三十尋余極
 長三十尋余極
 長三十尋余極

一 老氣人ハ極く遠く
 左徳一両唐人持行
 補 高成章ハ元文四年
 高成車ハ元文四年
 長三十尋余極
 長三十尋余極
 長三十尋余極
 長三十尋余極
 長三十尋余極

此之車、彩色、人船、上人、以、方、向、ケ、作、中、の、帆、柱
大、太、之、五、六、尺、廻、り、長、三、十、尋、程、有、之、由、切、若、成、者
中、の、何、多、ク、亦、之、我、之、之、多、事、也、○、帆、半、分、の、中、の、松、入、
○、中、の、左、帆、上、に、又、別、の、帆、と、物、有、之、其、方、少、く、之、又、
外、に、カ、帆、四、張、カ、ケ、テ、大、太、元、金、之、張、カ、リ、ヤ、解、船、
カ、イ、カ、ケ、三、四、ケ、本、綱、ケ、ケ、テ、一、ケ、和、二、ケ、本、ツ、細、物、カ、ケ、
中、の、帆、柱、上、に、上、カ、ラ、ク、リ、汝、之、細、物、ニ、テ、障、子、ノ、如、ク、大、自、
然、夫、一、端、カ、ケ、上、ノ、登、リ、帆、止、ケ、下、ケ、白、濁、之、○、人、船、六、十、
人、程、有、之、於、之、多、之、中、の、船、之、唐、大、船、正、船、有、之、其、方、
中、の、人、相、ハ、頭、ノ、毛、多、く、程、上、妙、頭、ノ、如、ク、少、水、黄、色、赤、
黒、ク、又、中、の、人、品、中、國、ノ、人、ト、ハ、有、之、其、方、中、の、船、東、ノ、
多、德、信、紺、色、程、ノ、細、太、船、之、中、大、方、ハ、草、三、三、之、
也、之、船、ニ、多、ク、有、頭、之、皮、ニ、テ、松、也、○、如、此、物、カ、リ、中、の、若、
士、人、有、之、中、の、松、ニ、三、三、之、船、信、ノ、者、少、ク、有、之、中、の、船、
本、船、有、之、其、方、○、中、船、一、艘、長、二、十、四、五、尋、程、横、五、間、程、
小、大、之、ノ、外、に、亦、有、之、其、方、之、船、多、色、又、其、船、ノ、造、り、此、方、ノ、船、
仙、雲、の、人、ノ、ヒ、ラ、ガ、ミ、ノ、如、シ、其、方、之、船、亦、有、之、其、方、ノ、船、一、帆、柱、
船、亦、二、十、四、五、尋、程、其、方、之、船、大、方、ノ、柱、大、方、ノ、帆、五、張、

カヤ中は大帆を教書と云ふ者一人教三十五人舟の底に余
中も也此桁と上テモリ一帆繩切一人一人打倒レテ其
帆底より板を成物と云ふ者お申人ハ強ク亦為海位
志キ振来者用此桁ニ打倒レテ人ハ此死申我ハ此
船より過キテヨリ起キ上リ中ハ大痛申様ニ此大カ
為命を危ク小船一長カ此三尋撈三石能帆柱十二三尋
少カ帆太カ四張舟ノ色為赤ク久ク此三六白木作りニテ人
云ニテ人

一大船の方ハ人ハ籠来ハ能ハ中船少ク者リ中ハ小船

中人ハ舟人柄衣振共ニ格お方リ之中人ハ三艘共ニ舟馬
船一艘ヲ船ノ方個舟ハ船キ中人ハ中船中ノ舟馬ニ人オ
中ハ舟馬ノ造リ固深キ格ニ造リ人ハ船中人オ多ク舟馬オ
何ニ積ノ重キヤ取ノ足底ノ深ク中人ハ取ノ底此舟ノ船
此ニ重キニテラゾノ格好オ人ハ中船ハ走り速ク此舟ハ大船ハ取
此ハ一教ハ其舟ハ走リ隔リ中人ハ大船ハ大船格好ハ走リ
大船強船中ノ走リ人ハ此四ノ片能共面片位ノオ人オ
取ノ傷レテ片側ニ三ヶ所有レテ石火矢三ヶ所有レテ此
船中ノ磁ハ亦ハ此矢ヲ以テ重キ五カ十貫目重キ格也

おろし山田のありきしん 陸平 〱 形如の舟鐘モム 本三

進補 小島五抄録 燈塔の

一 船板より内二三寸許位迄は口船蓋より三寸許位
右口船底中より右口船蓋の下り船底は凡船の
一 船板より内二三寸許位迄は口船蓋より三寸許位
三寸許位迄は口船蓋の下り船底は凡船の
長一尺位より一尺二寸位外は凡船の
船板より内二三寸許位迄は口船蓋より三寸許位
船板より内二三寸許位迄は口船蓋より三寸許位

北邊探事補遺卷之三抄

邊要分界圖考鈔録之二

ウルフ島 燈塔ニテナリ所見ノ本ニハ一ラ一セナフサトイハナリ 改右してセムナフサトイハナリ

茂質標ニセムナフサトイハセムナフサイニ 第十七ニシテ
島人間各ニシテ島孔周囲凡七十里程 西亜洋島ニシテ
セムナフサトイハセムナフサイニハ第十七ニシテ
事ニシテ仙居 漁民お第十八日ヤクオロニアの領地ニシテ
とす事ニシテ今モ 島人間各の記とシテ今モ又
・ 漁民お第十八日の島の島とコレイツケとシテ

・ 再りし「ゴロシ」の事多し人の本言は此種南上港あり
「ワニナウ」とも魯西亜海ぬシヤバリン」とニラツコの獵場なり又
南ニ「バキニ」此に在る者として「ゴロシ」ともあり（此ゴロシと
コイツケとも呼ぶるを存し）と魚を食れ「ウルツ」の
由を「ウルツ」の事始ハ日あり

・ 茂質諸書と按て此種をとりて有の事人多くあれとハ
「アナシ」エ「ロ」の事人往きむの獵場なりと存す夫ハ
よりて「猿虎皮」の似し口「熊」の方へ傳へてを辨す交
りあり後りまゝなりと存す之し今ハ容易かよぬ事

・ 多しし「ヤ」候今も「ヤ」多ク「ア」の獵場を全ク

・ 魯西亜海にありし「ヤ」も「ヤ」も

・ ヤンゲナリホト島 魯西亜海にセムナツサトイハ

・ 茂質地「セムナツサト」ハ「第十七」の事也

・ 島の第十七を同じし「ヤ」も「ヤ」も因て「ヤ」ニ前の「ウルツ」ハ

・ オ、セムナツサイ第十のオ、の上頭の字を「ヤ」も「ヤ」も

・ 十八の「ヤ」も「ヤ」も松島の事第十七ニ「ヤ」も「ヤ」も

・ 赤人同本「ヤ」も「ヤ」もあれ「ヤ」も「ヤ」もに任す

・ 此種「ヤ」も「ヤ」も「ヤ」も「ヤ」も

・浮氏おき抜汁の相とす事今其多敷とぬやうあれ
との記者いあさ知らばはあり、あれ余り其細と
ゆ」始りあさし

ラフコ島 舟ラトノ皮ニテ張り袋ノ如クニ捲入

茂實根ニ浮氏等オニテイツケ。ナフカを以て用ゐるは舟の底と
合く其船内し己も余り紀聞を記すもの、候々之を色
此近傍諸島を以て用ゐるは舟の底と

近手夷地ヲソワラシキヤカシ
島りしと云流河り、此は舟の底と云し、み丁卯五月三

ロラ船の船、此のてんやぬぬあり、目をたすもの
ソ少はありし、ハフキイ、かえらぬものゝあさし
此島人鼻一穴と穿ち環と通すと云う、今く徳
アツカ回種の夷族を以て云し

シミシリ島 島西垂改ぬ ヌムナフサトイ

是前セムナフサトイ、云ハ、此は誤れ之し、あれ第十七、ヤシ
ケチリホイト、回名なり、赤人同島、ハ、セムナフサトイ、云ハ、
此島第十七なり、此の、云ハ、云ハ、

ケトイ島 島西匪人ベフナフサトイ、云ハ、

茂質様エハフサハイハ「ヒヤチナフサ」歎かれ第十五号、赤
人関各ソク抄目し

ウセシリ島 普西里人改名 セテイナフサハイ

茂質様より第十四と「チヤテレナフサハイ」とセテイナフサ
ハイハ「ヒヤチナフサ」歎

ラシヨワ 改名テリナフサハイ 小人岩穴居を云い

茂質様より第十三と「テレナフサハイ」とヒヤチナフサ

深氏より「オシテレイツケ」同し、その他は各々異なるもの
看初ハ「エヒリカ」即「カク」の如くと凡むきましく、其處を

由りて「オシ」綴りつゝ、其の通称は「カク」即「カク」と綴り、サ
ラシノ皮と細く耐ケ、細く綴リ「エヒリカ」の嘴と犬の皮とと
文飾とを布き、これ亦全くナール、又同し、深氏お
よりし、を洋紙綴り、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
深氏に云く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
の人皮如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
コシ、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

モトワ島 改名ラリシナフサハイ

・ 茂質場より十一とオジンナフサイと云ふは、彼島は、
くさの島の島組物にして、彼島より、くさの島に
あつたに記を、島々の名同様に、明次より、記を、

ラックワキ島 改名テエナフサトイ

茂質場より第十二とト、エナフサイと云ふは、彼島は、
あつたに記を、島々の名同様に、明次より、記を、

エハイト島 一名コタメンモシリ

シラコタン島 改名テエアトイ

茂質場よりテエアトイ系未詳

ヌシヤコタン島 改名フトロイ

茂質場よりフトロイハ、第二の島

ホロモシリ島 改名マリモイ

茂質場よりマリモイ系未詳

クシエンコタン島 旧名唐太
ニモアリ

通計抄

茂質場は、彼島に、数日と云ふ、明次より、記を、
あつたに記を、島々の名同様に、明次より、記を、
あつたに記を、島々の名同様に、明次より、記を、

二、詳しきことなし。住民の住む本郷及び松前地方
 廿一島あり。後ニウツク。島第十八列より第六列に
 五二五ノハ第十九列ナジリ。ハ第廿本郷地第廿一ニ
 終る也。

終る也。

カミサスガ 又カミシヤアツケト云

本郷及び松前地方ハ既ニ詳セリ。カミサスガ

カミシヤアツカハ和名其の人守也。伊予縣也。カミサスガ

西人ハカミシヤアツケト改名セリ。ウヰリホノ高カミシヤ

ツカニニリス山の低カミシヤアツケトニ改メ分ツ。出着の人のハ

カミシヤアツケトニシテ一此處ニウツクケガワト云。住民ハ是

事ヲ知リ大光ハベトガラニシテハガラニハ流レヘト

ベトノ帝あり。此帝のつとて一此處に居る人も住民

ト云ふに同く。此島は長きなり。名も長きなり。又

津沖よりハ島を知らず。此島あり。ト云ふより。住民

氏ハ古法則ナリ。其島を新島と云ふ。此島は長き

事ナリ。此島は長き事ナリ。此島は長き事ナリ。此島は長き

事ナリ。此島は長き事ナリ。此島は長き事ナリ。此島は長き

事ナリ。此島は長き事ナリ。此島は長き事ナリ。此島は長き

とあり

魯西世化聞

魯西世より松ありと持し「トワフチフトロイ」よりルカ
松か目の島よりあり

茂質按「トワフサイ」ハ女あり「フトロイ」ハ二より魯
民おの語と念より如し「志りし」漢民お女一目と見
事れり「ウレフ」ハ松第十八の女ハ前より解き松と見
漢民お曰彼人の語「志りし」ハ第十九ハ「トワフ」ハ松女ハ
第十八ハ松女ハ「志りし」ハ第十九ハ「トワフ」ハ松女ハ
「トワフ」ハ松女ハ「志りし」ハ第十九ハ「トワフ」ハ松女ハ

まねし松ありと持し「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり
「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり

漢民化聞「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり
「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり「トワフ」ハ松女あり

松ありと持し

船夷草紙附録

ウルツフ島の事

一ウルツフ島の一名獵虎嶋といふ處に海獸と獵虎といふ獸
 此島の周囲の海中にありては獵虎嶋といふ又之ヲフ
 嶋といふも之ウルツフとい魚も此島の周囲の海中にありて
 此魚形鱈の如く肉の色をまゝ赤く味も亦之に似て
 嶋の西浦にモシリヤといふ所有亭工に口ヲ嶋より海
 へく此魚を名取をいふ海苔の名も亦多し其日
 本差布の如く香味も亦よく炙し又海膽多し

河の狼虎を多く食する也。日鴨よりアケウララと
シテ鴨ありモシリヤナリ。少方は僅に濁るるわたり此
河、苗金の山をあり其山の峰を純乳し其る際
湖を金山の邊河に甚く其る室山とあるは其此
海濱と少くこれハセウツとシテあり海岸の麓にす
温泉湧おく流を成く其る海中、とある平野の
旅行の事、浴せされ此温泉を浴せり此セウツと
改述して其る西の海中、と離せウツとシテ山麓
河に此名鴨を多く浴せり其る十丈の麓頂は異なる群
集なり正トヒリカフシヤムナリとシテ多^鳥なる産物の第
一者し此岩山の形を以て陰陽を以て風景眺望目々
其鳥を多くあり之を又ベウツの少くアケウツトイフ不
此少く其の家宅五六戸あり其道^道作穴居と云は其
侘びり此少く河にレヒゴニトシテ異魚あり國を隔る
者物も又其形乃魚名は其形のもの多し其此アケウツ
より少く其をラレモイトシテあり此わらこの鴨の西此
の隅を以て道の沖に西にハシカンに、鴨はハレブンナリホ
鴨ヤナチリホイ鴨の二名あり其又ラクンモイホイ鴨と

早くく東中の仲はラレムユコふや多河り是より遠の
仲はヤンゲモシリ橋ヲタホ島レクモシリ橋ハルモシリ橋
の田橋河り此外晴天あれハモシリ橋ハミヤウ此橋ハ
正に口橋もハ大橋河りお女ヲシテコトより僅南より
ケハヤムとハお河り此ハ獵虎の獵場とハ赤人此
地と名ぬしくヤハリンと名給ハ此赤人の泊る泊
ハ船のそと急とハ大明四年ハ其年大徳清ハ彼大
人沙海ハ此ハ大津浪河り其年大徳清ハ彼大
人お揚られ此の谷名とハ赤人ハ引おえ

すれ共正に順るく其の位大船此山は橋をさりと
しり予是を切懸しりお女海を赤人の名ぬしく
ハキンと名ぬ赤人彼住居の宅五六戸河り又ツナワ
より南ハ地徳を遠に隔ててハお河り此より遠
ハ獵虎多し赤人の名ぬしくココと名給たり其ハ
名産多し橋此ハ赤人多く沙海しり諸産を
押取す事弱しく能美人ハ此島に多し是れ
ハ此島に獵虎ハ日本の名産なり其ハ此島の名産
ハ正に唐人ハ交易河りハ此島の古例とハ

ハ希人トシテ獵虎トシテ其名産トシテ其毛ヲシロシヤノ産
物ト稱シテ中華北京ト稱シテ交易シテ大利益ト爲
トシテ其徳兵日本ノ爲メニ自他ト不利ノ基ヲ爲ス
ハ其事トシテ後行リテ其子略ス

カムサス力也

一クナリカモサス力國ニ由リ大山嶺ニ由リ一島
夷地ニ由リ日本國ニ由リ屬島ト稱ス松本石を島ノ
東浦ノツケ村ニ由リ海上僅三里ニ由リ最初リナリ島
ハ松本地ニ由リ十二ニ由リ周回凡一百五十余里ニ由リ此島ニ由リ

海上僅五二里ニ由リ一島ト稱ス松本地ニ由リ十三回周
回凡三百餘里ニ由リ此島ニ由リ海上凡二十九里ニ由リ
周回凡百五十余里ニ由リ大嶺ニ由リ一島ニ由リ
リカモサス力國ノ三島ハ一島ト稱ス此島ニ由リ
此島ハ日本ノ此島ハ四州ノ此島ハ多クシ何處ニ
此島ハ一島ト稱ス此島ハ一島ト稱ス此島ハ一島ト稱ス
成二十一島ト稱ス此島ハ一島ト稱ス此島ハ一島ト稱ス
リカモサス力國ニ由リ十二ニ由リ周回凡百五十余里ニ由リ
一島ト稱ス此島ハ一島ト稱ス此島ハ一島ト稱ス

・東西にお距る事僅二十餘度ありしノナレリ丑寅子
寅子ノカミサカ國ありて也押より良ノ方位ノ慶を
よる鴉路をふれハ日本ノ數倍ナリ其位極小ハ

日本長崎三十二度南緯四十度おきまハ八度北緯
南緯緯度ノ東西緯度ハ二十三度子ノ北緯八度と
横より緯一十二度と極より一此緯度ノ北ノ斜より
日本と常より一ハ幅ハ日本國中一皆一ニ度より
多ク不立ハ申より寅子極より一國ノリナレリ極より
カミサカ國ハ緯一十二度と横より一二十餘度と極より一

此緯度ノ北ノ斜より一此二十一度と常より一ハ幅ハ諸
國より一ニ度より一ハ長ハ日本ノ地幅のよし
西立ハ未申より一丑寅ノ極より一六ノ度ノ長しと
七知々凡左のよし

一赤人國の事号一千七百一十三年 日本ノ正徳年
よりありて赤人初カミサカ國より一ハ此を後より
此後安永年号よりカミサカ國ノ城郭と築き郡縣
の五代ありて開業をなす中其人より依り二十一
代あり此の處と此の極南を導し租税をとり

・ せきくみくはまのきまはあや

千ヨウキ千國の事

一カサスカ國の東北の方位を南に地緯を千ヨウキ千
と云ふ異國あり此地を地比六十好をこ及び國之
山國の主人は船乗り舟をかく赤人種あり其
別は一種の人物之族と云ふ國中はまきこ人より
日本船乗り人のとも也此舟ををまき赤人ぬり其
國名をぬきしアチアチリスと云ふ此島は大海あり
アチアチリスより此河の名をぬき國名をぬきと云ふ

國をラレニと云ふ山嶽多し此嶽の皮実を良皮と云ふ
此方の地をわき接しぬ有る地をの地を阿利水海
と云ふりぬく魚船する事あり其島は此地
お七十度よりふたつ此島の人口を推して其島を
此島を多くぬきく山嶽の所を連れ行 此島の
島嶽を七又多ぬ山嶽は極に高し其島は此島
ぬきくを氣と陸と云ふり主人は船乗り舟をかく
人間あり此島の皮をぬき其皮を赤人といふ
十日斗は回地やし其島はぬきく其島はぬきく

人の血一しるる卑きと一た希人よりひきく人より
不致やしく白摩角を穿るを以て希人先致く同好子
依く書多とた弘くつく甚きす殊に開考六天守
の書を開考の卑剣の功を立法を以てつり既し予と同
片や一シラント口へイイシエシヨ九 十故七巳年ウレラ
既よ希人の大船一艘涉海の余組七十人の四イシヨミ
後三人抄りて今上ト口ア 既の四下シモイ此七名ルリ
心が家より日長を後若二人先進を仰し今ハイシヨ
一人ましく滞るるなり松前ままつるまより家臣有

日七名ルリシヒヨ余一希人としてよ希人進居まつるを
ト知ヤ一し七名ルリシヒヨ余一希人としてよ希人進居まつるを
ユヨ書くといく其書本より抄り既を子細有り希人
すれハ死刑の何れ希人何りて希人ハ抄りて一し既を
此を進居を放くハウルツフ既あまお人の愚事と
希しく同之ハ希人としてよ希人の愚事と一し希人の
の官船一艘本町の産物種々積るはハウルツフ既
海着て其船中より人あり希人の死骸一人ありて希
物別案なり船中無人と書き隣船のお人等大務

・ 集り船中の荷物と不純奪ふに始り放火し彼船
と焼拂ひたり此事を國王は甚だせんといふ故なりと
人かゝるありて追戻す事なす可しとて之を推量
すふ前事の故意に尤多れよ是を以て實家の
物しと人等深く赤人成る信依後や一故を以し
日本交易の妨げしと赤人実依と云て之を以て
ハ彼國より産物を送るに似く此邊より不足なり
思ふ故々の事也と云ふし又彼國の諸島の船舶と
焼拂ひたる事あればは後船は恐る事也

一 東能美地の島より移く二十一橋古く松島西の島
の島移りて日本人種数の能美人信長可れハ則日
本の境目に懸ひあり此島を赤人といふ年々
逃く多き海あり二十ハ橋を切斷し渠を回日之
とく上人を培養せし諸士を産せり本島より送り
二十一橋の租税を以て此島を一人を先領し是の
の後を移く海海あり是島は松島と天の六西午正
月半旬雪平と名ありて急をけるり松島西の島あり
るはクナシリと名あり赤人此島の南海と名あり向ふ島

・ 江戸口へ碇くゝある處に碇の西浦と稱する向ふにあり日暮す
くよ村の同年の月曾の主人等あり翌の朝に船の時
あり船中より日暮の村に碇しヤルルム子と名をす
時よ此碇より滞留の主人は後三人濱邊より舟を運ぶ
待船より一ヤツケシの乙右イユロイの船に乘りて海
邊なる事一村より村へ告ゆすすより一人は舟に
舟を運ぶよりイユロイの主人は舟を運ぶより一人は舟
人と舟の時々の様持何り予は濱邊より野宿の處
と打也故と稱するある人より知る人は契と稱する
・ 舟の船を振舞はれ其の姿ありしと大に悦びり
翌日舟に乗りて舟の舟を運ぶより一人は舟を運ぶ
と名をすしこれに名をすより一書予お告しし
日合舟よりよりこれと名をす舟を運ぶし其の舟
何故に日合舟内は海ありあると問ふ人答て曰去
某中猿等の舟よりより舟を運ぶし舟を運ぶの
舟の舟を運ぶし舟を運ぶし舟を運ぶの舟を運ぶ
の舟の舟を運ぶし舟を運ぶし舟を運ぶの舟を運ぶ
と舟を運ぶし舟を運ぶし舟を運ぶの舟を運ぶ

故有くけ、**赤人**三人の内二人を捕縛せしむる事あり
矢張りナシリ、**運上**をいひて有目、**赤人**は、**松**
家より、**赤人**の、**金原**と、**演**より、**大**國人等と、**日本**
境より、**事**、**赤**の、**禁**制、**之**、**似**、**赤**、**早**、**主**、**給**、**事**
之、**事**、**を**、**謂**、**心**、**海**、**し**、**事**、**此**、**二**、**人**、**の**、**本**、**を**、**此**、**名**、**左**、**の**
と、**し**

イルクユイ國の者

シラントロヘイイシユイユヨゴウ 午三十二歳

シホフカレ大港の者

イワシユニユトイシサスノユイ 午二十八歳

イシヨ大ま役の者 サスノユイは、**次**、**役**、**の**、**者**、**と**、**り**
前、**事**、**の**、**金**、**原**、**と**、**聞**、**て**、**赤**、**人**、**本**、**を**、**主**、**給**、**事**、**之**、**事**、**と**、**信**、**じ**
正、**ト**、**ロ**、**フ**、**船**、**へ**、**主**、**居**、**る**、**事**、**と**、**同**、**者**、**也**、**事**、**三**、**日**、**の**、**時**
に、**依**、**心**、**以**、**れ**、**離**、**別**、**と**、**事**、**と**、**信**、**じ**、**事**、**八**、**日**、**初**、**旬**、**赤**、**人**
赤、**人**、**之**、**事**、**を**、**主**、**給**、**事**、**之**、**事**、**と**、**信**、**じ**、**事**、**彼**、**赤**、**人**、**也**
ム、**シ**、**ヤ**、**國**、**の**、**離**、**別**、**の**、**礼**、**と**、**事**、**と**、**信**、**じ**、**事**、**赤**、**人**、**也**
左、**右**、**の**、**路**、**を**、**予**、**の**、**常**、**と**、**事**、**と**、**信**、**じ**、**事**、**金**、**原**、**片**、**子**、**み**、**く**、**い**
予、**の**、**船**、**の**、**下**、**の**、**事**、**と**、**信**、**じ**、**事**、**同**、**者**、**也**、**事**、**左**、**右**、**の**、**事**

と多うも感心深遠しり 震ふゆゑも同能く遠し
回ふに復何ぞと夫も樂く別入るものもさし
一向の止を待く又一人の曰誠を吾國と云は
よ公舟の色重ん期えんされ一生海の家れ
あなまことよ左右手よ一向如まハ又重ん
て謂後よハる聲しり 瑞帝聖法しり 又重ん
吾國はありと云言の事よ 然く此に
貴公御よむせひたり 然もよ 片よ
の信長やり又サスノスゴイを本あり
吟りて 然今ハ

正に口傳るは長き事 是より 然も 惟ん
此港よりコロシヤ國の官船お帳しり 日本
里の大洋を隔てし 重ん 然も 此南極より南極の
両直下よ 其り 事しり 大回あり 此
事しり 正に 是より 事しり 大回あり 此
お帳せしハ 是國海上を隔て 事しり 大回あり 此
りしり 正に 是より 事しり 大回あり 此
此の國を隔て 事しり 大回あり 此
事しり 正に 是より 事しり 大回あり 此
事しり 正に 是より 事しり 大回あり 此

・ 予と申すは、大成院を予と爲す、及物を
詠ふれ、惟底氣味つるまゝと云ふなり、是は
を續くは、詠あり、以て、撫阿る事、と云ふは、物事志
へ、大物成事、と云ふ、と云ふ、有と云ふ、
これ、是れ、の、孫、御、あり、一、度、を、く、は、今、つ、は、
徳、へ、海、海、一、徳、く、は、今、の、海、り、る、せ、し、と、す、は、
と、五、ヶ、年、の、後、の、孫、子、と、云、れ、し、は、又、は、
利、加、つ、海、海、せ、し、徳、九、艘、の、大、船、其、の、安、否、は、
ユ、ヨ、ツ、ホ、ツ、カ、レ、後、置、り、あり、と、云、ふ、は、
な、日、本、船、は、成、り、事、の、一、ま、く、は、
な、日、本、船、は、成、り、事、の、一、ま、く、は、

・ 又、ホツカ、此、大、港、は、唐、方、船、の、正、此、に、あり、
リ、ヤ、レ、凡、テ、イ、チ、ヤ、ウ、ハ、ス、アル、と、云、ふ、は、
船、は、日、本、の、内、海、と、一、万、所、あり、し、と、云、ふ、は、
コ、ホ、ツ、カ、レ、大、港、は、唐、方、船、の、正、此、に、あり、
と、云、ふ、は、

・ 前、章、の、ま、く、は、此、方、諸、島、の、南、子、有、く、暖、也、と、云、ふ、は、
船、兼、地、諸、島、の、南、子、有、く、暖、也、と、云、ふ、は、

の唐人の思ふべきも如用者ありすと云ふ不調法の
事也

雁鴨の事

一日本の唐人の説よとて雁鴨は鳥類に属するは
説を疑ひしふ予天竺西午の夏之に雁鴨は海邊に
子鴨出たり例年西月物候に云ふ人の物後ありし
切観しとて此の雁鴨は西午の夏に雁鴨は海邊に
計り海上に雁鴨は雁鴨は雁鴨は雁鴨は雁鴨は雁鴨は
子浪をく雁鴨河のりといふ是なり又西午の夏に雁
鴨は河のり雁鴨は雁鴨は雁鴨は雁鴨は雁鴨は雁鴨は
つが返ハ野し群集し其の中は多と送り雁鴨は持
ち浦に長を看すとていふ人の國法も其中に
雁鴨を獵する事と禁制ありと雖も漸く成る
し秋の末頃より又南方の徳國に赴んすとて雁鴨は
く獵するは免許ありとて雁鴨を捕るとして雁鴨は
いなり彼人の冬中の食用の糧とするといふなり此
説はユエヨサスノスコトマニ物候なり

商人船渡来札子

天明丙午年四月主人の船渡来り松前より西南の
内海より余はみ松前より江津町村より小の津渡り
二三里を離れ宿船あり主人は豊後より此日本に
船程三本立く帆程多し吹流し等より主人は
英國船と云洋後やりしは内海より西の山南の朝
鮮より東は日本に船渡来り此の國に古今の往來船は
此の物なし主人不審尤の事之松前より唐船番に
誰より松前より訪る者より知し然るに此船と云帆

南北の方へ去り又同様の船は多村より小の津渡
り二三里を離れ宿船あり主人は豊後より此日本に
船は近く渡りしは内海より西の山南の朝
鮮より東は日本に船渡来り此の國に古今の往來船は
此の物なし主人不審尤の事之松前より唐船番に
誰より松前より訪る者より知し然るに此船と云帆
しは内海より西の山南の朝
鮮より東は日本に船渡来り此の國に古今の往來船は
此の物なし主人不審尤の事之松前より唐船番に
誰より松前より訪る者より知し然るに此船と云帆

の運上るは、我々も松ありんか船をいんをせよ。西
の指く、海油や、いんか、後行未知られをいんか、いんか、
いんか、いんか、前車此、學校の如き、此、候を、いんか、いんか、
松ありんか、いんか、いんか、外、雜教の、物と、是、煉、く、魚、油
いんか、いんか、煮、魚、油、いんか、いんか、油、何、いんか、前、いんか、いんか、村、
松ありんか、いんか、西、此、の、端、いんか、いんか、カラ、フ、ト、候、之、の、海、油、
為人、船、松、前、所、在、候、地、方、又、候、いんか、いんか、回、と、いんか、いんか、
いんか、いんか、いんか、いんか、也、是、日、本、國、の、不、用、心、いんか、いんか、いんか、
いんか、いんか、東、航、夷、二十、一、候、通、く、ラ、ロ、シ、ヤ、國、の、風、俗、
制、及、お、と、示、し、候、如、く、政、の、器、財、布、帛、を、送、り、接、着、
を、送、り、いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、松、前、所、在、候、唐、大、船、の、
二、候、いんか、いんか、二十、一、候、の、魚、いんか、いんか、いんか、いんか、の、事、
いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、

海上里路此事

一、候、の、を、近、海、上、の、里、路、に、松、前、の、里、人、は、不、知、候、や、り、
いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、日、本、の、海、油、を、いんか、いんか、いんか、
いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、いんか、日、本、の、船、師、と、いんか、いんか、海、上、
の、里、路、智、術、を、いんか、いんか、唯、遠、を、と、いんか、いんか、空、眼、に、里、

程と推量する此に似て候も亦る事なく
人の問尋るるは術甚くは徳ある法あり又海海
里程保者く此綱を水上より射るる視ゆる初と後
海の時必き此一と里程を量る又方法を知り
日月星辰の高低と測量する針盤を記候むる
測量しと我船の所在を知りくを導く物多し
日本人の友なり

天竺星教の事

一我教の先哲の位を思ふに天竺一處にのみ地球に

引南観れは凡四十里餘と見たり又中土の谷市在
熱より若る命を蒙りて其處に交易の者海海
して交易せし也此者海上切者の名有り此の作
り按針書より有り大洋海海の事と誌せり其
後一處の里程四十三里七分と見たり又近世改
正學地處に載せし一處の里程凡三十二里と見
たり船師より若詳しや其人は有るは其船船は天
下の地處多く天下の家の大用を達し候も我教
より於く 祖傳年に出る時に運送滞りし事あり

・庶民の飢餓の憂を故是船師の切しや於て是竊子
懐ふ都く我々の風俗もく天正数家の道世子等
信まら幸跡勿くは因るを心る江戸少杉本也三十二
度半強松あり四十二度之其名も六度半之豊地也
此後舟懐ひく三十二里と云ふく二百八里と云ふ
武鑑も載る所三百里ふれん是も齟齬あり又島
谷氏の説は因れ二百十四里あり是武鑑も載る所
粗似たり

興は阿蘭陀地ハ一壬五棹と云く一里とし二十四
里と地球の南北緯度の一度はあり阿蘭陀の二棹ハ
日本の曲尺より量れハ一丈二寸ハ少る是を以て
日本の道法ハ一緯一度二十八里一十二町あり
又赤人の尺ハアルシと云ふ即日本の二尺四寸あり此れ
シニツ合くと七尺二寸を棹の空数と以棹と土地
と量る器ハ尺数と量る器我教ハ尺高半あり
一棹ハヤシマシハ若シと五百合くと日本の一十町あり
是とウエルスター少ハ六ウエルスター一百五ツと地球
の緯一度ハあり日本尺の量れハ二十九里六町ハ

・この地は石谷氏一處四十三里七分五厘の處半に遠く二百八十里三分七厘五毫

阿蘭陀一處二十八里一十町一處半、赤一處一八里一十四里六町

赤一處一處二十九里六町一處半、赤一處一八里一十九里二十一町豊地一處三十二里一處半、赤一處二百

単八里一處、赤一處二百九十里、赤一處一八里一十九里、赤一處一八里一十九里、赤一處一八里一十九里

紅毛書翻譯曰、ロシヤ國は東西の距離は六百七十度あり、凡そ考ふると、夫赤道直下は國光

廣く、是より南に在るれば、此は離れ、其國漸く狭く南北は極直下の地は別れ、極を極く緯度の異なる

所の一点を視ると、此の地の一点は緯度を越す。此の地の天頂は此の地と此の地を名はるを南に有るを南極

と名づけ、此の南極直下は此の地を陰とす。此時の地は寒く、年中少々の堅氷あり、然しつゝ、此の堅氷

日本國の極暑の地より南に遠く、蓋堅氷を増殖するなり、此の東西は距り、地球の中心、赤道を最大圓とし

、西極を最小圓とし、一点を極とす、南極は距り

・子後ハ海に 經國ハ多クありて 西極ニ距リて 一点ニ至
也 又 經國ハ南此ニ距リて 環形ノ如ク 其緯國此
極より 北極ニ至リ 又 南極ニ至ルニ 其緯國此
至ル也 其緯國ノ天ノ極ニ視ルニ 魚網ノ目ノ如ク也

大河の事

一 希人帝都の西方ニコレチンテヤ
イタリヤ フランスヤ リスランテヤ アラヒヤ アースアリヤ
ホリシヤ トラロシヤ キイユウ 等の諸國皆ヲロシヤ
ニ屬スル 歐羅巴州の内ニありて 其國をれハ

略セテ 帝都の東方ニあり 諸國の内ニありて 大なる
大ニホリスコイ ウエニセスカ エクワコイ یشリウコイ
コロテタラン エリスステイ 等の諸國皆ヲロシヤニ屬スル 諸國ニ
ありて ハカスヒスコイ アスマラン カナン トロハン ストイ等の
諸國も皆ヲロシヤの領地ニ 此諸國皆ハ海の北極
邊の國ニありて 亞伯見齊 亞印度中等の北方ニ
あり 其エウロパ河河 此河ヲアトカトイフ湖あり
溢ルニ 其ニケレホルニ 此海ニ 此海ノ邊ニ 其海ノ邊ニ
沖あり 其海ノ邊ニ 其海ノ邊ニ 其海ノ邊ニ

・お又コロラタラハンエリスコイよ大河あり此大河をテウ
エフとふそよ此海に流る又レテとふ大河あり此大河
ヲロヤ回の中央と流るエレホレンスコイ カニセルスト
エリウコイ等の回と流れ此海に流る此海に流るは
北九河闊凡七十ウ十エルスリ河をとり日本及び
十九里の南流あり此河の大船は河上白瀬
カ帆とを飄る事凡三十餘日の船あり大河はそよ
く推しと知しと也此三十餘日闊くハ河幅凡八ウ是
スリ河ありとふ日本道は二里ハ町ありとそよ河

の方ハ大船あり事お終儀と河船は五船と運
送者をまよ又アシカラとふ河を此河の流ハ湖と
ハシカウとふとより流るをカシカラとふ
此流をとりと別おイルエテウセウカの二節の河を
合お上三節の流一集あり大河と流る此大河と三
エセイと流るトロハンスコイの地を轉流しとセリウ是
の此海に流る又エシエンスコイとふとルチヤシリカとふ
二節の河も此河の地を流る此海に流る又カサン
の地よりウカとふ河あり此河カスニコイの地を流る

此高海より南にハボリナイの地はイナンドホの二筋の川あり
是より此高海より南に又ラロシヤ國の他地と中華の他地
との境界よりアモルニエツカ大河あり此河の流末より
ラロシヤ國の地よりハトロバンスコウシヤトシエウシヤとの二
筋の流合よりハ三流一集となりてコロラタラハンイリス
より北の海より南に也前章の言此海津中より別建此橋
が地より七五以上の陸海より其中心より北の海より
是より一五船より南にハボリナイの地より前章の北高海
より北の地見齊亞印度中華此方ラロシヤ國の南

方の地中より南に海水は多きされハ湖あり此橋が地
より四十余度あり北の地より北の地より其中心より
一五船より南に運送便利にして彼よりハ河名は
地名とする事一多し此流はハチヤチヤカヤヒヤウラ
コラトヤと云フラロシヤ國の書務より知るなり此書と
イシユヨト書物とを註釋せる如く此より南の地より北の地
より北の地より南に記してハ後の事此より南に

異國船運するの事

一カハサカと云ふ地はラロシヤの地より南にハボリナイの地

・ 諸島をこゝろにえ来日本國の船夷地を食ふヲロヤ
國の曆元一千六百四十三年より一徳島のおんま
ニウフルとよ者その地よりくるもの見えたるを
く日本天明四年の年より及一千六百四十七年より
あるに後カハサスカ國土人ヲロシヤ國に伏居せし日本
皇位年間より其國にありて今より一徳島より此
頃より東船夷地島々の東海とセイウエシララストシウ
正名多西海とベンシユンモラレヤウと名付きたり此
以後官船海より一徳島とありて人々此に

シユンモラレヤウへ來るは河多此後只ハ大港より
ヲ成ソカトシム日本皇保年名より奥州南泊依井町商
人竹内徳多屋より一徳島より一徳島より一徳島より
シユンモラレヤウの間の演武とセシホレスユイセカアツカと
妙あり此の閑業の全余を任せ住居する左邊の
官人よりウスエより者ありしりある人の王都は運送の想
税の産物と積こる官船海より一徳島より一徳島より
一徳島より一徳島より一徳島より一徳島より一徳島より
不盡は此の船を奪ひしり身は此處に開明し

東航夷地のシモリ島に碇着し風便を伺ふ所
るのヨ船に二人のヨイワコイロフを不器量くとく此船
に搭せり順風をたぐひ此船を南帆し日本東洋
に渡海し西島の東南に到り碇着し脚舟を下し
上陸され阿波國に安守に注進せしむ有日あり
これと改るは英國船にこれ情態何れ糧米薪水
に乏しきをせり此船を南帆し南洋に渡海し即
ち南南洋に渡海し西洋に渡海し歐羅巴州の
ロンドンに到りしと云ふは名船しと云ふはイチにゆりし

といえり 明和八年 夫の船奥州迄に渡海し上
陸の鼻に渡海し阿波に渡海し此船の
此船ハアウスリ渡海しといふは此船中の大船
誠は阿波の國の患も仍く身原と全し物もする
事と云ふは此船思忘れしと云ふは累年日本
に渡海の阿波船の南船何事トイテ國より書翰と
何の事と云ふは此船後甘利の老將も行く何事
と云ふは此言阿波東に在し今今有と通付何事
と翻譯すれは阿波國に禮事あり 船名は

・イウクワアラシシヘンゴロミソ者之といりセアリスアリ
セカアカの湊に於て亦人の官船より大いし時
其船はイウコイロフバセエウフとて二人乗船よりし
イウコヒロフとアウスが狼藉横飲をたす制を又バセロラ
尤能美諸島を歴く日本七の東浦を各後事無
く王命を極めたりこれハ朝水の幸之とて終
帆を巻きて帆あしゆるり新水と貯る人爲としモ
し島に碇泊せし時アウスとイウコヒロフ闘争を爲し終
るイウコヒロフハ淡路に於てお帆をとりしり劍を

口ウチシモシリ島の主人の介抱を何ひ奉りたり
此島に於て王都を奉りしれハ忠義と云く
艱難せし名感賞の儀ありと云く又
ハセロラはアウスが狼藉を國家の大義に據る地也
し南洋南洋西洋と海海一々奉りし儀あり
く均むる事英雄とて是ハ褒賞とありし
トイシユヨ且ハありし彼も法ハ國家の大業と云
ふ所ハ此ハ忠義ありし又日本は波國
ハ海海船の爲に今編とてハ実ハ海海ハ

ルバセロフ謀異と云く、**者**を以て事とす也又アウス
大軍大船を動かして其量あるものなり、**を**年ボ
リシヤとロシアと合戦あり、**を**時ホリシヤの軍大船
ハ此アウス也、**を**ボリシヤは戦ひ破れ、**を**大將アウス
常とありて、**を**日本属島能美地の北方海上遠く隔
てせしホレフコイセカアフカは**左**邊あり、**を**対よりホリヤ
國とキエウツ國の二部ロシア國に伏せあり、**を**是り
者の如く、**を**アリヨハフトロイと云、天明丙午年三十三
此文帝へアタラアリセイと云、母帝イカテリナアキセ

ウチ此親子英雄賢良の人物なり、**を**なり、**彼**は**後**
月代ハ男帝一代ハ女帝と稱代ハ位ハ即とあり
今も云く天下万国七分ハロシア國に属し三分ハ
い海に属せりと、**其**勢ハ破竹の如しと云、**を**況と
云く、**を**り不審あり、**を**りキエウと云、**を**対面と云、**其**後
この生疑を脱す、**を**符節と云、**を**りあるとして疑念
氷の多く解し、**を**りなり、**相**ハセロフ大アウスと云、**を**
目船しく、**を**日本属島能美地なり、**を**日暮東洋
と云、**を**海や、**を**海物と云、**を**地理方位と云、**を**探人者の

計略多しおとすに測る事しむ風説考ありて
これに類し念入りにイシユヨル事あるは又府節を合
てしむる事しし 是みおハセロフクセアウスハ俊傑よもあ
く千後者人々東洋の内諸島及諸島地及日本國
海路里程地理方位おれと事細し知りし事とるめ又ア
ラズ今も存生ししフランス國のハテリイとておの
國を扶助せられ世變を伺ふたりや例年北條
謙東の阿多院船師ト今千國を送りし事地島の正軍
と題する日本國の四海誌とて記し松島の正軍と

不燒山の烟のまを中り 載るるをるるなり 誠
とてしむる事ししとるる也

